
虚空の惑星&It;ANOTHER STORY>

天崎 剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚空の惑星 > ANOTHER STORY <

【Nコード】

N3723C

【作者名】

天崎 剣

【あらすじ】

核戦争により崩壊した未来の地球。地上に住まうことの出来なくなった人類は、巨大ドームでの生活を強いられていた。絶対権力を握る政府に立ち向かうため、一人の科学者が反旗を翻す。やがて、それは反政府組織ESをも巻き込み、巨大な嵐となっていくのだ。同名小説「虚空の惑星」の短期完結版。本編と設定は同じですが、別のストーリーになっています。1997年作。【完結】

1・逃亡（前書き）

10年前、筆者が書き上げたものです。
誤字脱字以外、修正しておりませんのであしからずご了解を。

1・逃亡

巨大なビルの内部で突然警報が鳴り出した。警備員達は一斉に異常発生区へと急ぐ。場所を確認してみると、そこは政府の最重要機密ファイルの管理所だった。

どういうことだ、あれが外部に漏れたら大変なことになるんじゃないのか。担当はどうしたんだ。十数人の警備員達は不安を隠しきれなかった。政府の要人は皆帰宅していたから、なんとか自分達だけで解決してやろうという気でいた。

闇の中に男達の足音だけが妙に響く。警報は止まない。冷汗が手に滲む。よりによって、警備員の待機室から一番遠い、地下十階から地下通路を抜けたところにある、あの研究室とは。

何故だ。何故犯人は逃げ場の無いあの部屋にわざわざ忍び込んだのだ。ファイルの存在を知る者……。大変な輩が迷い込んだものだ。エレベーターに乗り込み、ドアの開閉スイッチを押し、地下十階を指定する。急がなければ……。男達は肩で息をしていたが、その眼光だけは野獣のように鋭かった。

事件現場のファイル管理所兼研究室は闇の中にあった。

研究室の機器はとりわけ壊された様子はない。ひとつだけ、高さ二メートル・直径一メートル程の円柱型のガラス容器が破れて、中から何かの溶液が漏れ、そこらじゅうを濡らしている。部屋の片隅で、背の高い四十代前半の男が、十歳くらいの少女と共に蹲ひざまっていた。少女は裸で毛布に包まっている。その身体はびしょびしょだった。

小さな身体は寒さと恐怖で震えている。男はぎゅっと少女を抱き締めた。

「大丈夫だ。俺が救ってやる」

男はそう言っつて、不精髭の生えた顔を少女の頼に寄せた。

警備員達が研究室に辿り着いた時には、書報が鳴り始めてから既に十分という時間が経過していた。

一斉に銃を構え、ドアの向こうの様子を窺う。

水のはねる様な音がする。

一同は息を呑んだ。緊張が走る。

一人が合図をして、ドアを蹴り破った。

「誰か居るのか?! 返事をしろ!!」

男達は揃って研究室に突入した。

人の居る気配はない。容器から液体が濺々と流れ出ている。

だが、油断はならない。決して。

誰か居る筈だ。ここへの通路はこれ一本しか無いし、秘密の抜け穴など存在しないことは自分たちが一番よく知っている。抜け出せるものか。辺りを見回す。ふと、部屋の片隅に動くものを見付ける。微かに動いている。

「誰だ……そこに居るのは!」

怒鳴り声が響く。

蹲っていた影がのっそりと立ち上がる。

小さな影がもう一つ在る。

「私だ……」

低い声がした。気張って少し落ち着きが無い。

「あなたは……エマード博士!!」

警備隊長らしいごつい男が一步前に出る。正体の解った途端、警備員達は安堵の溜め息を漏らして、構えている銃を下に降ろした。隊長はゆっくりと、エマードという男の元へ近付こうとした。その時、

「来るな! 近付くな!!」

エマードが大声をあげた。

一瞬、空気が凍った。

そして次の瞬間、男達が見たのは、自分たちに銃口を向けるエマ

ードと、彼の腰にしがみついた少女の姿だった。エマードは右手で銃を溝え、左手をズボンのポケットの中に入れた。

「ひい、ふう、みい……。成程。思ったとおりだ」

ポケットから顔を出したのは、カードサイズの小型メカだ。目で位置を確認することもなく、慣れた手つきでボタンを次々と押し始めた。表情が見る見る冷たくなっていく。

「案外簡単だったな。ここで事件が発生すれば警備員が全員集合すると思ったんだ。これでお前等に逃げ場はない」

しまった！！ ……彼等がそう思った時にはもう遅かった。先程蹴り破ったドアの後ろに頑丈そうなシャッターが轟音をたてて降ろされた。

ごくりと唾をのむ。待っているのは確実に死だと悟る。

「私が誰なのか、よく知っている筈だ。だが、どんな人間かは知らなかったらしいな」

「エマード博士……。あなたは狂っている」

隊長は震える体をじつと堪えながら言った。

「狂う……？ 果たしてそうかな？ 狂っているのはお前等ではないのか？」

「……？」

「狂人に狂うの意味訊いても答えを得ることは出来んか」

右手の人差し指を銃の引き金に掛ける。銃は弾丸用ではなけ。レーザー銃だ。当たれば致命傷……。いや、死だ。死しかない。

男達は彼の異名を思い出していた。狙撃手^{スナイパー}。政府の一科学者

のくせに、銃の腕はプロ並み、それ以上だった。どこで培ってきたのかはわからない。命中率が100%に等しかった。自分達警備員でさえ、彼に銃を教わったじゃないか。避ける？ 無理だ。彼は恐らく頭か心臓を狙うだろう。畜生。なんて奴が敵に回ったんだ。

「The Endだ。死ね」

エマードの口が少し笑った。

朝になった。とある超高層ビルで騒ぎが起こった。

警備員全員が死体で見つかったのだ。額の真ん中を寸分の狂いもなく撃ち抜かれていた。例の地下十階の研究室に横たわっていたらしい。

役人たちは、防犯システムの作動が正常だったか、防犯カメラに何が映っていたかの確認を急いだ。狙われたのは何か、何故こんなことが起きたのか、全く解らない。そもそも、そこに何があったのか、知る者もない。

暫くして、防犯カメラの映像処理を終えた者達から信じられない報告を受けた。一同はどよめいた。

ビルのなかには暗澹あんたんとした空気に包まれた。

犯人はディック・エマード。政府のナンバーツーとも呼ばれた男だった。

ビルの最上階。事の成り行きを見守る男がいた。広い室内でただ一人、窓の場で、空を眺めている。

暗い空。造られた青い色に温かさはない。暗く沈んだ濁った灰色を思わせるような、飛び交う鳥さえない青い天井。ドームで覆われた鉄の大地の上で人は栄える。日の光の無い世界。遠くに人工太陽が見える。

男は手を後で組んで、じっと佇たたずんでいた。動くこともなく、ずっと。

切れの長い東洋系の目鼻立ち。背は高く、歳は二十代後半であるうか。凜とした顔つきはまさに美青年と呼ぶに相応しい。

「ドクター」

後ろで声がしたので振りむくと、秘書が血相を変えて入ってきたところだった。余程急ぎの用らしく、汗を掻いていた。

「何だ、そんなに急いで。電話で済むような用件じゃなさそうだな」

秘書の女は、汗をハンカチで拭い、落ち着いてから一気呵成に話し始めた。

「ディック・エマードが逃走しました。彼は警備員を例の部屋に集めて殺し、その後手薄になった警備を抜けて逃走したと思われず。防犯システムは殆ど正常に作動していましたが、克明に彼の行動を捉えています。尚……、言いがたいのですが、申し上げます。エマードはFILE・Dに関するすべての資料と実験体を持って逃走中……。ドクター……、このままでは……」

心配気にドクターを見る。

「そんなことか。電話でも構わなかったな」

意外な返答に、秘書の女は戸惑った。ドクターは再び手を後ろで組んで、外を眺めた。

「エマードの逃走など。この世における数知れぬ裏切り、犯罪からすれば、九牛の一毛に過ぎん。しかし、流石はエマードだ。防犯カメラに映ったり、例の部屋を一般人の目に晒す真似などしてくれた……。どうやらこの私を挑発しているらしい。だがよい。彼が私に及ぶとはない。全力で立ち向かって来るがよい。その度にねじ伏せてやる。私の力だな……」

言い放った男の後ろ姿に、秘書は底知れぬ恐怖を覚えた。

違う……。我々凡人とは全く違う考えを持っておられる。偉大なお方。このお方の手に掛かれば、天才・エマードといえども一溜りもない……。紺色のスーツの影に彼女はほっと息をついた。

「何処に逃げ隠れようとも……私の目から逃れることは出来ない。

エマード……、お前には猶予をくれてやろう。FILE・Dの完成の後に……お前の命を貰い受けるとしよう」

肩まで伸びたストレートの黒髪を掻き揚げ、男は高笑いした。顔に似合わぬ少し高めの声が気味悪さを倍増させた。

この男が誰なのか、ディック・エマードとは何者なのか。それはまた今度語ることにしよう。

とにかく、これが始まりであった。
秩序正しき世界、地球に、この時、
漣さざなみが立ったのだ。

2・地球大改造計画

それはまだ、西暦という言葉がこの世にあつた頃の話である。

西暦二十一世紀という時代を迎えた時、地球は危機に瀕した。各地での内戦、そしてそれに乗ずる世界大戦。二度と使うべからずそんな願いも虚しく、それは核戦争へと発展する。二度三度使われた核はその噴霧で地球を覆い、地表は死の世界となる。核の冬の訪れである。

人類はそこで死に絶えたかのように見えた。

世界大戦の最中、ほんの一握りの科学者たちがこんな計画を立てて国際連合に提出していた。「地球大改造計画」。それは全く無謀な計画だった。

国連の者は皆眉を顰めた。

これは禁断の方法だ、あつてはならない。我々の手で地球をどうこうしようなどと、思い上がるにも程がある。我々は神によって与えられたこの地に清一杯生きなければならぬ。決して汚してはならない。なぜなら我々は、この母なる太地と共に……。

「我々が神になれば良いのです」

一人の科学者が言った。会議室はどよめきを見せた。

神に？ それは考えてはならないことだ。駄目だ。やってはならない。

沸き起こる欲望。いや、抑える。それこそ、我々は自ら死の大地を築くこととなる。

国連は彼等の計画を全面的に却下した。人間とは……何と恐ろしい動物なのか。彼等は地球を物体としか捕らえていない。

「生を選ぶならば、我々の計画にご協力願いたい」

言い残して男達は去ってゆく。彼等がまだ諦めたわけではないというのは周知の事実であった。

それから二年過ぎ、三年過ぎ、次第に戦火は弱まっていた。し

かし、人類には地上の、生活はなくなっていた。核シエルター、それだけが彼等を生かしていた。無論、全ての人が入れたわけではない。一部の権力者たち、上級市民。貧しいものは次々に消えた。シエルターの中で一体どれだけ保つのか。そんなのは高が知れている外に出たい。人々の我慢は頂点に達していた。

それから何年経っただろう。かつてニューヨークと呼ばれた地で一人の男が行動を起こす。

男が誰なのか、全く分からない。男はボサボサの金色の短髪で、もう随分長い間剃っていない髭が妙に目立つ瘦せこけた頬をしていた。着ている物といえば、ブルージーンズのパンツに白いTシャツ。どちらもボロボロであちこち汚れたり破けたりしている。激しい飢えのために筋肉らしい筋肉もついていない。細い腕と足で、辛うじて身体を支えている。

フラフラした足取りで、だが確実に、彼は一点を目指した。

ニューヨークの地下・核シエルターは世界最大規模で、一般人も多く収容できた。アメリカの各シエルターとも地下で繋がっている。

男は何処からともなく現れ、薄暗い地下のトンネルを歩いていた。青に近いグレーの瞳を上目遣いにして、荒く息をする。疲れては少し止まり、壁伝いに歩き、また止まる。

こんな時代、男を運んでくれる車やなんかがある筈もない。足元には異臭を放つ水溜まりが散らばっていて、歩く度にぴちぴち音をたてる。照明は百メートル毎に片側に一個ずつ有るだけだから大分暗い。例の、オレンジ色の灯りだ。

クラツと、男の体が大きく左右に揺れた。限界か……？ 男がそう思ったとき、遠方にニューヨーク・シエルターの入り口が見えていた。

数日後のことである。ニューヨーク・シエルターは突如大きな地

震に襲われた。正午を少し過ぎた頃だ。

人々は怯えた。地下なのに、この揺れは何だ。避難するにしても逃げ場もない。広い真つ平らな地下室にバラックが密集しているだけのこんな場所で、一体何処に逃げろというんだ！！

だが驚いたことに、その地震はたった一回きりの、ズズーンという大きな揺れだけで済んでしまった。拍子抜けして暫くは動けなかったが、ある程度時間が経つと大抵の人は普段通りに動きだした。

マシユー・ヴィクトは、その揺れに不安を抱いた。

彼はもう、^{よわい} 齢七十の年寄である。頭天边はすっかりつるつるに禿げてしまっている。マシユーはかつて国連の主要幹部だった。自分がいいた頃の国連が地球をこんな世界にしてしまった……。悔やんでも悔やみきれなかった。

以前の威厳は消え失せてしまっていた。今はよぼよぼの、^{じい} 只の爺である。

そして、その爺の脳裏にある画面が過つた。^{おぼ} それは国連に訪れた、科学者たちの姿であった。正気を失ったように恐るべき計画について語る、あの目。すぐにでも何か仕出かしそうな男達を見ていると、何だか得体の知れない恐怖とも似付かない、妙な気分になったものだ。

今もまた、同じような感情が渦巻いている。何かが起ころうとしている……。そう思うと彼は自分のバラックから飛び出して走っていた。

年甲斐もなく走つたために、目的地に着いたマシユーはへとへとだった。目的地 それは、このニューヨーク・シエルトアのメイン・コンピュータである。シエルトア内の空気清浄、気温管理、食物の製造、他シエルトアとの通信等、あらゆる機能の中核なのだ。更にこのコンピュータは、世界の各シエルトアとも繋がっている、いわゆる世界の中核でもある。

そう、もし彼等が動くとしたら、このニューヨークで、このコンピュータに何か遣ら^やかすに決まっている。コンピュータルームには

暗号ロックがなされていて、民間人は立ち入れないことになっているが、彼等のことだ、暗号は知っているに違いない。

マシューはコンピュータールの前に立ちはだかるその扉の前に立つと、カードキーを取り出し、第一ロックを解除、続いて暗号をインプットして第二ロックを解除、扉を開けた。

重々しい扉の向こうに、マシューは見てもいけないものを見てしまった気がした。床に、一人の男が倒れていた。うつ伏せになって、大の字のまま息を引き取ったようだ。マシューは死体の側によると、顔を見ようと、少し死体を傾けてみた。

「こ……この男は……」

痩せこけてはいたが、見間違う筈もなかった。この金髪、ボサボサで短くなっているが、前は少し長めでリーゼントに固めていた。傲慢な鼻、それに、この目だ。忘れもしない、あの科学者達のリーダー格の男だ。「神になればいい」と豪語した男だ。

なんて奴だ。ここに入り込んで何をしようとしたんだ。……そういえばこの男、何だか変な匂いがする。下水のような匂いだ。

地下道路を通って、わざわざこのニューヨークに来たのか？ 一番近いシエルターからだって、車で丸一日はかかる。それをまさか歩いてか？ 何という執念……。

マシューはふと、寒気がした。

男が何をどうしたのか詳しいことは分からない。だがメイン・コンピュータのプログラムに手を加えたのは確かだ。これからどうなるのだろう。計画は実行されるしかないのか？ マシューは己の無力さを恨んだ。彼は国連で男が言った言葉を思い出していた。

「我々人類が地球という惑星を滅亡に追いやってしまうのは時間の問題です」

二十代そこそこだったその男は、そうだ、縁なしの眼鏡なんかをかけて、自信たっぷりにそう言っていた。

「滅亡してしまっただけからでは遅いのです。人類は地球なしでは生きることが出来ません。今現在、月と火星の開発が進んでいるわ

けですが、人類がそこに定住するまでになるには、まだ多少なりとも時間が必要です。しかし、月も、火星も、地球ではありません。我々に適した生活を送るには、地球に生きるしかないのです。今はこの星が永遠に続くよう守らなければなりません。人類がいつまでも地上で生活を営むためにも、この星を機械で包んでしまうのが一番良いというのですよ。そして核兵器の使用により放射能で汚染された大気を遮断するドームを造る。ドーム内で人類は永久に栄えるのです。それが一番良いでしょう。放射能のしみ込んだ土の上を歩いて汚染されるよりも、窮屈な核シェルターの中で死に絶えるよりも」

それからにんまりと勝利の笑みを漏らした。左手の中指ですれた眼鏡をくいと上げる仕草がまた憎たらしかった。

男は自分の前でくたばってしまったが、彼の計画は生きている。阻止しようにもコンピュータへの介入の仕方が分からない。壊そうにも壊せない。ガシャンガシャンという機械音が部屋中に鳴り響いた。入り口の扉は完全に閉まっていた。

マシューは慌てて内側からドアのロックを外そうとした。だがどうだ。開かない。「エラー、エラー」電子音が応えるだけだ。閉じこめられたのか？ この空間に死体と共に。畜生、畜生。力無く鉄の扉を何度も叩いた。老いた拳はすぐに痛さを訴えた。もう、どうすることも出来ない。

気付くと、後ろから機械の動く音がする。誰も居ない筈なのに、ひとりでに？ 振り向いた、そして驚愕した。メインコンピュータに据え付けられた巨大なスクリーンに浮かんでいる文字に。

「AI（人工知能）始動
コレヨリ 計画ヲ 実行スル」

マシューの記憶はそこで途切れた。今更どう足掻いても無駄なんだろう。

昔見た緑色の大地を思い出した。何処までも続く草原。青々と繁る木々。木は林となり森となって地球を温かく包んでいた。

今、この地球には人間以外の動物は殆どいない。偶に見る衛星からの映像には、死の大地が広がるばかりである。木は枯れ、動物たちの骸が山を成している。我々が死を齎してしまった、それが彼等に好機を与えた。

皮肉だ、あまりにも皮肉だ。頬を涙が伝った。

マシユーはそのままドアの付近に倒れた。

その後、メイン・コンピュータに近付く者はなかった。

コンピュータは確実に任務を遂行していた。瞬く間に、地球は変わっていった。

何十年と経たないうちに、あの男の言葉は現実となった。

地表は殆ど機械で覆われ、主要都市はドームで守られた。空气清新がドーム内で行われ、暗い空には人工太陽が打ち上げられた。シエルトーの中から人々は次々と這い出し、地上での生活に感動を覚えた。都市はかつてと同じように活発に機能し始めた。ビルが建ち並び、道路には車が走り、人々は満足そうに街を闊歩する。

そうこうしている間に、月と火星の開発も佳境に入り、食物はそこで栽培、飼育できるようになる。地球は豊かな星へと戻った。

……果たしてそうだろうか？ 今の地球の色はどんなだろう。蒼いか？ いや、違う。灰色だ。こんな灰色の星を好きになれるだろうか。澱んだ灰色の何処が幸せなのだろう。

さて、幸せには不幸がつきものである。人々の幸せは消し飛ばされる。突如現れた集団によって。彼等は地球計画班（the Earth Project Team EPT）と名乗った。ニューヨークに本拠地を置き、封じられたメイン・コンピュータに手を出した。彼等はそれを使って全世界を征服しようと企んでいたのだ。更に皮肉なことに、彼等は例の科学者達の残党であったのだ。人は彼等をマッド・サイエンティスト（狂科学者）と呼んだ。

「地獄の一世紀」と呼ばれた時代がある。それは、人類の存在の理由を全て覆してしまうような、悲しい時代だった。

狂科学者たちは、著しく民族・宗教を否定した。理由は分からない。人々は言葉を強制され、公用語の英語を話せぬ者には罰が与えられた。ほんの少しの罪も許されず、死刑にされた。

地球は機械によって守られ、管理され拘束され、監視されている。従うしかなかった。ずっと従って、自己を忘れ、木偶の坊となって死んでゆく。そんなのが一世紀も続いたのだ。果たして、果たして、肉体的苦痛と身体的苦痛、どちらが苦しいのだろう。人々の涙はいつしか枯れてしまっていた。阿鼻叫喚すら感じ取れない。

秩序ある世界の完成。人々は希望という言葉を忘れかけていた。

3・その空に太陽はあるか（前編）

地球暦四九九年、初春の日の午後のことである。

ネオ・シャンハイの某高校で、校長が一人の少女を校長室に呼びだしていた。もうしばらくするとその少女がやってくる。校長は自分で呼び出しておきながら不安でたまらなかつた。

校長は皺苦茶の婆おばであつた。気の強い面構えはしていたが、どう踏んでも少女に勝てないことは明瞭なのだ。彼女がこの学校に転校してきて早三カ月。問題を起こさない日はなかつた。毎日のように職員室に呼び出されているというのにケロツとしている。気味が悪いというか何というか……。とにかく何を考えているのか分からない。だが、それも今日で……。

「エレノア・オーリン……」

呟いて振り返り、窓の外を見る。中庭の植木が人工太陽に照らされてきらきらと輝いている。

地球がEPT（地球計画班）政府により統治され始めてから約五世紀。人々は政府に従い、そして豊かな生活を手に入れた。その思想も穏やかになり、先史の時代より犯罪も減つた、戦争も起きない。なのに彼女の目ときたら、それはもう獲物を探る獣のようだ。エレノア……。正体の知れぬ娘をなぜここに入れてしまったのか。今更ながら考え込んだ。

校長は向き直つて少女を待つた。

広い机の上の紅茶が甘い香りを湯気に乗せてそこら中に運んでいる。しかし、そんなのは何の気休めにもならなかつた。

インターホンが鳴つた。自動ドアが、シュンと音をたてて開いた。「失礼します」

一礼して少女が入ってきた。ドアは再びシュンと音をたてて閉じた。少女は大腿でこちらに向かつてくる。立ち止まり、「何か御用でしょうか」

全く平然とした様子である。校長はふうと溜め息を吐いて話を始めた。

「エレノア・オーリン……、あなたに重大なお知らせをしなくてはなりません……」

少し体を乗り出して、エレノアに言い聞かせるように話す。

明るい金髪と深い緑色の瞳を持った少女は静かに婆の話を聞いた。「いいですか、エレノア。よく聞いてください。あなたにはこの学校を辞めていただくかなくてはなりません……。退学です。これは学校が決めたことです。従ってもらいますよ」

二人きりの校長室に少し冷たい空気が流れた。校長は、壁に掛けである歴代の校長の写真や政府から戴いた数々の賞状やトロフィーが自分を嘲笑している気がした。なんとかしてこの寒気から脱出しなければと思っていた矢先、

「はい、分かりました」

エレノアの声が聞こえた。今までとは少し違う、低めの声だ。表情が少しずつ変わっているのに気付く。笑みは沈んで冷徹に、無駄の無い美女になった。左手で髪を掻き揚げて耳に掛ける。チラッとパールのピアスが覗いた。

腕を組んで校長を見下し、彼女は、

「これでもう六校目です。お気になさらないで下さい。皆さん保守的な方ばかりなんです。この世界がお好きなんですか？ この星には何がありますか？ 教えて下さい」

と言っ。

校長は耳を疑った。まさかとは思ったがこの娘は……。

「^{エス}ESよ!!! 誰か来て!!!」

目一杯力を込めて叫んだが、防音のこの部屋から外には聞こえない。

少女は沈黙している。

校長は忙しい手で手元のスイッチを押した。手が汗だくだ。あまりのことに視点が定まらない。おろおろして後退りしたがすぐに窓

にぶつかった。言いようのない恐怖に襲われる。

「ESが潜んでいたとは……、私も迂闊だったわ。こんな……、こんな……」

「私があれば暴れても気付かないなんて最低ね。それもこれあなた達が保守的すぎるせいよ。そう……、私の問題行動を公にしたくなかったあなた達のミスだわ」

エレノアは一歩一歩前進し始めた。

と、大きな音が聞こえた。部屋の両側の壁が回転し、新たな部屋がひとつずつ現れる。中から計二十体のガードマシンが一斉に飛び出した。人型のそのマシンはY字型の拳を突き出してエレノアを襲った。が。

「どうしてこんな雑魚ザコを出すの。もっと強い相手が欲しいものだから……」

助走も付けずにハイジャンプ、そして廻し蹴り、五、六体を一掃する。着地と共に足払い、そして中段にパンチ、蹴り、相手に隙を与えない。あつという間に二十体は地に伏した。

エレノアはさつと浅葱色の制服のスカートをひるがえ翻して校長に向き直った。息も乱さず表情なく近寄るエレノア。

校長は既に気が気でなかった。

「あなたには一生『空』の意味が分からないわ」

そう言うときエレノアは校長の後ろの窓を突き破って、五階下の地上に飛び降り、そのまま何処かへと消えていった。

ネオ・シャンハイのとある場所で二人の男が向かい合って将棋を指している。

二人は人を待っているのだ。待ち人は少女である。若い男と中年の男と二人いるが、少女はこの内の中年の方の娘らしい。

そろそろ帰る時間かな、と、父親が腕時計を見る。

一方で若い方の男は堅い床の上に座布団を敷いて胡坐あぐらをかいて悩

んでいた。王手をかけられているのだ。成金ごときにやられてたまるかと思いつつ、将棋盤の隅に追い詰められた自分の王将に成す術はなかった。

「畜生、負けだ。完敗だ」

負けた男は悔しそうに体を反り返した。短い黒髪の前髪を立てた、今年二十歳になったばかりのその男は、ジュンヤ・ウメモトという日米のクオーターである。武道を嗜たしなんでいるから体ががっしりしている。精悍せいかんな顔つきがとても涼し気だ。

ジュンヤはしばらく床に手をつけて反り返したまま地下室の天井を眺めていた。

罅割ひびれた天井の隅には、何処から入り込んだのか、蜘蛛が巣を作っている。飾りなんて何も無い。このコンクリートで固められた地下室でこの人と将棋を指しているとほっとする。世の中の煩わしさも忘れてしまいそうになる。

ジュンヤはゆっくりと姿勢を正して男を見た。男は指し終えた将棋の駒を定位置に並べ換えていた。真つ黒な髪に少し白髪が目立つ。立派な口髭にも白いものが見える。

そうか、この人ももう四十九になるのか、年が経つのは早いものだ。そういえば、俺が初めて会った時、この人はもつと若かった、俺も子供だった。ジュンヤはふと、七年前のあの日のことを思い出した。

その日、十二歳のジュンヤは父親に将棋の指し方を教わっていた。父のシロウ・ウメモトは将棋の好きな男だった。いつも優しく、そして強くて、ジュンヤは父を心から尊敬していたのだ。ジュンヤは地下のコンクリートの部屋で父と将棋を指すのが一番好きだった。父がいつも、

「将棋はなあ、こういう静かな所で指すのが一番いいんだ。精神が安定して冷静になれる。我々のような武道家の端くれにとって、最高の精神鍛練の場だと俺は思う。それに、このパチンと音が響くの

がこの上なくいい」

と言つて、嬉しそうに自分を見てくれるのが一番好きだった。

父は、ES^{エス}という団体の創設者だった。

ES、正式名称はEarth Saver、反政府組織である。

地球は今日、狂科学者を中心に組織されたEPT（地球計画班）により、支配されているが、ESはそのEPT政府による圧政から人々を解放しようという勇気ある者達がつくる団体なのだ。シロウ・ウメモトは息子だけでなく、そうした人々にもまた尊敬されていた。頼れる男に訪問者があった。

父と将棋を指している折、インターホンが鳴った。一度ばかりでなく何度も何度も鳴るもんだから、流石のシロウも、

「何だ、何度も何度も。一度押せばそれでいいだろうが」

と言つて、そそくさと階段を駆け上がった。ジュンヤは何か面白いことが起きそうだという子供ながらの予感を胸に、父の後を追った。一階に着いても、まだインターホンは鳴っていた。なんて迷惑な奴だと思いつつも、シロウは平静を装ってインターホンに出た。「どなたですか。用件を述べてください」

「シロウ・ウメモトだな。話がある。私はEPTの最高幹部の一人でディック・エマードという」

答えたのは意外な人物だった。これは全くの賭けだと思った。玄関先の監視カメラには、一人の男と、彼に抱えられて毛布に包まれた少女が映し出されていた。シロウは自分の前のモニターの映像の意味を暫く考えた。外はもう暗い。

シロウの出した結論はこうだ。

「今、戸を開けます。話を聞きましょう」

ジュンヤは二人の応答に胸が高鳴ったのをはつきり覚えている。

初めて会った時、その男は酷く汚れた服を着ていた。髭は数日間剃っていないらしく茫々だつたし、髪はもしかしくしゃで、眼の下に限なんかつくつていた。本当にEPTの偉い人なのかなあとジュンヤは不審で堪らなかつた。父の話によると、このディックという人

は逃げてきたのだという。寝ずに逃げてネオ・ニューヨークシティから、ここネオ・シャンハイまで来たのだと。しかし、謎めいた男のことよりもジュンヤが気掛かりだったのは、彼が連れてきた少女のことだった。

少女は名をエスターというらしい。長いストレートの髪にドキドキした。そつと、父達の目を盗んでエスターのいる部屋に潜り込んだ。ベッドの上でぐっすり眠っているエスターは眠れる森の美女みたいな気がして、ジュンヤはゆっくり覗き込み顔を少しずつ近付け唇が触れそうになって慌てて体を起こした。ああ、俺は何をしていたんだろう、馬鹿じゃないか、これじゃあ。それからもう一度エスターの顔をじっくり眺めて部屋を出た。

「お休み」

初恋だったなあ。思いながらジュンヤは再び将棋を指し始めた。ディックは無言のままだ。

「こうしていると、親父を思い出すんだ」

「……」

「親父がいた頃は三人でやったよな、こうやって、将棋さして。結局、親父には一回も勝てなかった」

「三年だ」

ディックがふと呟く。

「ああ……、三年だ。親父が死んで三年になる。あんな事件さえないりゃ……」

「不幸な事件だった」

「そう、あんなことさえなければ親父は……」

ジュンヤの中で三年前のシロウの死んだ日が動きだした。

4・その空に太陽はあるか（後編）

夜、ESのアナーキスト達は闇に身を隠す様にして直走^{ひた}っていた。それまでの本部を敵に暴かれ、行くところもなくただただ走るしかなかった。

シロウ・ウメモトはジュンヤと妻のメイシイを連れ、ネオ・シャーンハイの住宅地の路地を行ったり来たりしていた。

ESの者は皆、団体でいるところを追い詰められるのを恐れて、分散して各個、安全な場所に逃げ込もう、という作戦にでた。コンピュータで管理された街の中で、いつ見付けられるか分からない。偶に、ESの仲間の悲痛な叫び声が聞こえてくる。次は自分たちなのか……、そう思うと足の震えが止まらない。EPTはESの捜索に何十人も警備隊員を動員している。もしそんなのに見つかりでもしたら大変だ。どうされるのか見当も付かない。とにかく今は逃げよう、ビルとビルの間か、民家の中か。自分はいいい、だがジュンヤとメイシイには生き延びてほしい、シロウは切実に天に願った。

どれだけ走つたらう、目の前に半壊した民家を見付ける。およそ、EPTの奴らが何かこじつけてやったんだらう、少し前まで人がいた跡がある。

「ここなら大丈夫だ」

シロウはそう言うのと、先ずメイシイを、そして次にジュンヤを、その壊れかかった家の中に入れた。

もうじき崩れそうな壁が殆どで、家の四隅のうち、一隅だけが完全な形を保っている。シロウはそこに二人を寄せ、自分は見張りだと言って穴の空いた壁から外を監視していた。

ジュンヤもメイシイも、そんなシロウの姿に胸を痛めた。二人は知っていたのだ、先程から聞こえる、銃声に倒れる数多の声の声の主は皆、ESの幹部連中であることを。下っ端の者など、誰がESか知る由もない。もう何処へ行ったのやら、気配すら窺えない。シ

ロウはESの創設者である、面が割れていないわけがない。
「もう夜も遅い。お前達はここで休みなさい。あとは俺が何とかする」

二人の心配を余所にシロウはそう言っただけで、散らばったゴミの中から毛布を見付けて二人にそっと掛けた。シロウはその時あまりに穏やかだった。起き上がったシロウに話し掛けようとするジュンヤを、メイシイは押さえ、首を横に振った。ジュンヤは悔しくて堪らなかつたのだ。己れの無力さと父の勇気の間にとれほどの隔りがあるかを実感していたのだ。悔しさをじつと堪え、眠ったふりをした。二人が限を閉じたのを確認すると、シロウは再び穴の空いた壁にぴたりと張りついた。

そして夜も明けてきた頃のことである。瞼の裏に、ふとして父の姿が映った。眠ってはいないつもりが、少し寝ていたらしい。目を開けると、そこに父の姿はなかった。もしやと思つて壁の穴から外を覗いた、そこには……。

立ちはだかるEPTの兵数人と、棒立ちしたままの父がいた。

父さん！！ 叫んで出ていこうかとも思う、が、しかし、父の「何とかする」の声を思い出し、堪えた。母のメイシイはまだ気付かぬ様である。父さん……、何とか、何とかして奴らを倒すんだろ。俺はこのままここに居るだけいいのか？ 父の意志とプライドの高さは重々知っていたから、手出し出来ない。

「ここに居るのはお前だけか」

兵の一人がシロウに銃口を向けた。父は両手を挙げて首を縦に振った。

「そうだ」

「ではここでお前を殺しても何の物音もせぬ筈だな」

「そうだ」

兵達は揃って父に銃を集めた。助けに行かなくては！！ だが、父を欺くことは出来ない。拳が唸る。

父さん！！ そんな奴ら、父さんなら簡単に……！！ どうして

……?!

「撃て!!」

男の言葉を皮切りに、銃声が鳴り始めた。ズドドドドド……。鈍い音がこだまする。無抵抗の父の体は海老のように何度も反り返り、跳ねて、穴が沢山開いた。血飛沫が雨のように滴った。ジュンヤの体は火照り、知らず知らずのうち涙が込上げた。衝動に駆られ、何度も飛び出しそうになる。父は人形のように宙で踊っていた。銃声は父の意識が遠退いた後も、暫く止むことはなかった。

銃声が止み、兵が引いて、辺りが明るくなってきてから初めて、ジュンヤは外に出て父の無残な姿を見た。血の海の中でうつ伏せになって死んでいた。

ジュンヤは漸く慟哭した。

血に濡れた顔は意外にも穏やかだった。

父さん、「何とかする」とはこのことだったのか？ 俺達を庇って死ぬことだったのか?! こんな悲しいことってあるか?! 拳を何度も何度も地に打ちつけた。拳は、灰色の金属で固められた地に砕かれて血色に染まった。

後ろからそつと肩を抱く者があった。母のメイシイである。母は自分に掛けられていた毛布を持ち出し、シロウの骸むくろに被せた。

「この人はね、始めからこのつもりでいたのよ」

メイシイはそう言ってジュンヤの隣にしゃがんだ。ジュンヤは驚いてメイシイの顔を見た。母はただ静かに笑って、

「悲しい顔をしていたら、この人はきつと怒るわ。『俺は そんな軟弱な男に育てた覚えはないぞ』、なんて言ってね。だから泣いているだけでは駄目よ。これから何かを始めなくちゃ」

自分を励ましているかのような母の目から、ほろりと大粒の涙が溢れ出た。彼女はしゃがんだまま、打ち上げられた人工太陽の光りが強くなってゆく様さまを眺めていた。

ジュンヤも立ち上がってその様を見た。

「太陽があると云ったね、親父は」

次第に青くなる空を見つめた。

「そう、空には太陽があるの。空は、こんな囲まれた塀ではないわ、天に通じる道なのよ。開けた空には雲という 白いものがあって、いつも違う顔をしている。雲からは時折、雨と呼ばれるシャワーが注がれるんですってね。かつて空には飛べる獣が居たという……。私達もいつか飛べるかしら……。って、これ、お父さんの口癖だったわよね」

「うん……」

ジュンヤは拳を固めて天を仰いだ。

「飛べるさ。きっと飛べる。このドームの空に太陽はない。でも絶対に、いつか飛んでみせる、太陽のある空を。それが父さんのために俺が出来る、最高のことだと思わないか？」

朝になり、二人の周りにも人が集まってきた。逃げ延びたESの仲間達だ。誰かが新しい根城に丁度良い場所を見つけたと言い、皆でそこへ向かった。古びたビルと、その周囲の数十軒の空き家に住まうことになった。

父の遺体は他の人と一緒に火葬され、小さな骨壺に入れられた。その壺は今も、この地下室の上のウメト家の棚の奥に大事にしまつてある。父のための墓標さえたてられない鉄の大地を、ジュンヤは嫌いになった。

「でも、あのことがなかったら、俺は今の俺であることが出来なかったと思うんだ。だから、今さらどうこう言うことじゃない」

ジュンヤの将棋を指す手がぴたりと止まった。両膝の上で拳が震えている。強がったってどうしようもないだろう……。ジュンヤの心はそうも言っていた。

時計が午後三時を知らせた頃、ディックとジュンヤは地下室を後にした。そろそろ、少女が帰ってくる時間なのだ。一階に昇ると案

の定、メイシィと少女の話し声がする。リビングを覗いた。

「ただ今、ジュンヤ。それに、パパ」

浅葱色の高校の制服を着た、あの少女である。

「お帰り」

男共の顔が急に綻はらんだ。ディックなど、それまでの神妙な表情など、吹き飛んでしまったようだ。二人は空いているソファアの席にでんと座った。

「ジュンヤ、こっちの調査はもう終わったわ。ついでにまた退学喰らっちゃったけどな」

少女は幼気な目をジュンヤに向けた。少女の名はエスター。エレノアとは彼女の偽名である。覚えているだろうか、あの、ディックと共に現れた金髪の少女は今年、十七になる。シロウを師とし、持ち前の才能で武道を極めたエスターは、ESの特別調査団の一員として、偽名を使い、世に紛れて生活している。特別調査団の任務は、EPT監視下における人々の思想とESに対する意識調査であり、その結果をもとにESは大革命を実現しようとしているのだ。ここでの調査団の活動は今日で終了だ。

「そうか、御苦労様。実はこっちの方も今日で完成したんだ、な、ディック」

ジュンヤはちらりとディックを見た、ディックはこくりと額いた。ジュンヤは立ち上がり、意気揚々に叫んだ。

「今日、決行だ。俺達は今日、空に出る」

メイシィはその時、ジュンヤの中に若き日のシロウを見た。

その目には涙が溢れていた。

「その空に太陽はあるの？」

メイシィの口からふと、懐かしい言葉が出た。皆、見えぬ空を仰いでいた。

「あるさ……」

遠い空の向こうで太陽が燦々と輝いた。

5・残された戦士たち（前編）

夜。ドームの天井に据え付けられた人工太陽は一日の役目を終え、静かに光を緩めていき、青から橙へ、橙から紺色へと空の色を変えていく。約十時間の充電をした後に、また同じように空に色を戻していくのだ。辺りはビルから漏れる光で淡く照らされているが、それでも郊外の辺りは闇に包まれる。

「出航三十分前」

アナウンスがビル中に響いた。ネオ・シャンハイのES本部ビル、建ち並ぶビル群から少し外れたところにある五階建ての古めかしいそれではあるが、中は最新鋭の機器で埋め尽くされている。

ES創設者シロウ・ウメモトの死後、その息子ジュンヤと元EP T幹部ディック・エマードが中心となり、ESはある画期的な計画を企てていた。今日はその計画、いや、作戦とでも言うっておこうか、その実行日である。

ジュンヤとエスターは五階の司令室にいた。巨大なスクリーンが部屋の三方を囲む室内で、彼らは出航を待った。

その部屋は、例えるなら宇宙船の司令室だ。何十人もの人達がそれぞれモニターを確認しながら各パート毎に準備を進めていた。エスターは広いスクリーンをゆっくり見渡してジュンヤに話し掛けた。「本当に行くことになるとは思わなかったわ。……幾らおじ様が空に出るのを夢見てたからといって、何もここまで……」

少し間をあけてジュンヤが答える。

「エスター、それは違うよ。俺は俺で考えた結果なんだ。今、この星に必要なのは希望だ。EPTに支配され続けることが必ずしも人類の存続に繋がるとは限らない。人間は人間として生きるためにやらなければならないことがあるだろ？俺達は地球に生きているんだ、この星を守らなきゃならない、でもそれはEPTと同じではないんだ。その昔、この星は蒼いと聞いたことがある。それなら

ば今一度、灰色を蒼に変えてやろうと思うんだ。それが可能かどうかは……可能かどうか、やってみないことには分からないしな」
「そう……」

エスターにはジュンヤの気持ちは分からなかった。自分は自分のために動くものだと思っているからだ。地球のために……、何をしようとしているのだろう。自分から使命を背負おうとする気持ちがよく分からないでいた。

「エスターとディックが居るから出来ることなんだ」

「え？」

「……でなきや、俺も所詮、只の人間だ」

人々の動きが一段と慌ただしくなる。ディック・エマードは二人の居る司令室に現れ、マイクを握った。汗だくのディックに、エスターはタオルを差し出す。ありがとうとタオルを受け取り、言った。「出航十分前だ。これより空間転移装置ワープシステムを作動させる。メイン・エンジン始動、転移位置の最終確認をせよ。目標はシベリア上空。ドームについても同じ、全てのシステムを作動させよ」

ディックのアナウンスを合図に、人々は動き始めた。
地下でワープシステムが動きだす。ビルを含んだESの住宅地を丸く包むように半球状の透明なドームが両側から迫り出して天辺で隙間なく重なる。円の内側の四隅の地面の一部が割れて、地上に空気清浄機が四台現れた。

夜の街、ネオ・シャンハイに機械の動く音が響き渡る。感付いたのがEPTのネオ・シャンハイ支部の奴らがヘリコプターや車を飛ばして集まって来た。そいつらは口々に罵言を放つ。ESの阿呆共はこんな所に潜んでいたのか、何をしようとしているんだ、何をやっても無駄だというのに、EPTの偉大さが分からないのか、無駄だ、無駄!!

スクリーンを通してEPTの動きを見るディック。かつてEPTの者だった彼の口から零れたのは、「負け犬めが」という冷淡な言

葉だけだった。

EPT その意味するものは何なのだろう……、何が彼らを駆り立てるのか、そして、自分は何故、ESと共にあるのか……。エスターは今、旅立つ船の中にいる自分の意味を問うた。しかし、考えても何も始まらない。答えはいつか見つかるだろう、時がそれを知らせるように。

「一分前」

全員椅子に座って時間を待った。

「……十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、……」

「GO」

ズオーン……。けたたましい音がいっばいに立ち、ドーム全体が少し持ち上がった。半球は青色の光を帯び始め、全体が青白く光ったかと思うと、弾けて光の粒になった。光が消えて、目が慣れた頃にはもう、目の前には何もなくなっていた。クレーターのような大きな穴だけがそこに残った。

EPTの連中は目を丸くして互いに顔を見合わせた。

初春の夜は眠れないまま明けようとしていた。

場所は移って、シベリア。一面真っ白な銀世界。夜の闇の世界に吹き荒れる嵐。吹雪が絶え間なく続き、大地を覆う。この地はEPTの地球大改造計画にもかかわらず、そのままの地面が残された、数少ない地の一つである。氷河期と同じように地球は冷えきってしまったらしいが、この地には未だ動物の気配がする。

のそり、のそり、雪を踏みしめて今、一頭の熊がやってきた。雪原の中で迷ってしまったのか右往左往している。

突然二発の銃声が出て、熊はその場に倒れた。ざくつ、ざくつ、ざくつ、ざくつ、何が走ってくる。吹雪の陰に、人が見える。その人物は倒れた熊の傍に寄り、子供のように喜んでる。その後、熊を背負って再び来た方向へと歩きだした。空の方に気配を感じて見上げると、見たこともない巨大な物体が浮かんでいる。地面を丸

く切り取って浮かべたような半球が空にいたのだ。その人物は熊を背負ったまま、立ち疎んでしまった。

ESの移動要塞はシベリア上空に到着した。吹雪の中の人物が見たのはこの要塞である。要塞はゆっくりと高度を下げ、地上に降りた。雪の中に球が少し埋もれた。下の半球から足のようなものが何本も突き出して地面に刺さり、球を支える。

内部ではこの地の調査を始めていた。コンピュータで弾きだされるデータにたじろいだ。その驚くべきデータとは……。

「ディック!!! これはどういうことなんだ!!! シベリアの気は五百年以上前と変わらない、自然のままだ。こんな草木の無いところでどうしてこんなことが……」

息を切らして司令室に駆け込んだのは、特別調査団団長のハロルド・スカーレットだった。椅子に腰掛け、コーヒーを飲みながらディックは、答えた。

「そこがEPTの狙いというわけだ。地球はまだ完全に死んではない。だが、一部の枯れた大地を見たことで人は地球が死んだと勘違いしてしまう。地球の気圧が全て毒され、それが今もそのままであるとは限らない。地球には意外に何の影響もつけて無い場所が山程あるんだ。特にこの地は昔から緯度の関係で寒冷な地だったからな、何処かに何かいるかもしれないぞ」

特別調査団の中から十数人が選ばれ、三、四人ずつグループに分かれてシベリアの調査に出ることになった。エスターもスカーレット団長も、共にシベリアの地に降り立つメンバーに選ばれた。

慣れない防寒着に身を包む。防寒着といっても、毛皮みたいな動物の毛を使ったものは勿論無いから、宇宙服に似たような素材で作ってあるスーツを着込んだ。

ビルの地下に降り、要塞の下部ハッチを開ける。

ゴウと吹き荒れる風を初めて体験した。

顔に雪が当たる。冷たい、この白いのは何て冷たいんだ、しかも

歩きにくい。足が膝まで埋もれてしまう。こんな中、調査するのは……。先が思い遣られるな。

ハッチが閉じた。

こんな所に人が住んでいるだなんて思えないが……。スカーレット団長は不安を抱きながらも、ディックの言葉を信じてみようかと思っただった。

6・残された戦士たち（後編）

調査に出ようと団員達がそれぞれの方向に歩き始めたとき、遠方から何かが走ってきた。この豪雪の中をアスファルトの上を走るかのような勢いだ。姿が見え始めた。人間だ、肩に大きな物を担いでいる。そいつは団員の手前三十メートルぐらいの距離まで近付いて、突然持っていた猟銃をこちらに向けた。百九十センチもある大男だ。団員達は圧倒されて、両腕を挙げた。

「貴様等！ 何者だ！！ あんなでかい船で空を飛ぶなんて……。
大方宇宙人が何かだろう！ 昔よく地球に来てたらしいから……。
目的は何だ！！ 地球征服か？！ どうなんだ！ 答える！！ ブ
ツ殺すぞ！！」

熊を背負ったその男はまだ若いと見える。右の頬に獣から受けたらしい三本の爪の跡がある。風で乱れた銀髪の奥の冷たく鋭い目が、団員達を威圧する。

「我々は真正正銘の地球人だ。君はこの地の人間か？」
スカレット団長は彼の気を静める気持ちで言ったが、何故か男は逆上して、

「地球人だって証拠が何処にある。俺は知ってんだぞ。宇宙人は何にだって化けられるんだ。そうして地球人の中に潜んで暮らしてたってことをな！！」

全く見当違いの答えに当惑した。何という疑い深い奴なんだ、これじゃあ会話も何もあつたもんじゃやない。外界から長い間何の干渉も受けずにいると疑い深くなるとか聞いたことがあるが、こいつは極端だ。迷うスカレットを余所よこに、男は叫んだ。

「証拠が無いんなら認めてると思っ*て*いいんだな？！ てめえらが宇宙人だってよう！！」

引き金に手を掛ける。その時、エスターが叫んだ。
「証拠って何？ どうすれば信じてもらえるの？！」

少し黙って男は言った。

「女か……。そうだな。俺と一晩寝てくれよ。もし宇宙人だったら、犯った瞬間に気が弛んで元の姿に戻るんだとよ。どうだ」

「ええ、いいわ」

即答だった。その場に居合わせた者は自分の耳を疑った。 エスター……。お前という奴は……。尋ねた男も男で、仰天して思わず引き金から指を外してしまった。腹を抱えて大笑いし、そのまま銃をしまって団員達を眺めた。視線がエスターで止まった。

「気丈な女だ。気に入った。顔も俺好みだしな。てめえらが地球人だつてのはこの女に免じて認めてやる。俺はアンリ・ゲルニコフ。ずっとこの地に暮らしてる。女、名は何だ」

「エスターよ。エスター・エマード」

「エスターか。お前はいい目をしているな。なあ、俺ん家に来いよ。今日は熊があるから、旨いもん作って歓迎するぜ」

アンリはそう言つてエスターをまじまじと見た。

「嫌だと言つても連れて行くつもりなんでしょう。分かるわ」

「フン。なら、話は早い。行こうぜ」

エスターの手を強く引つ張つて、アンリは前進し始めた。

スカーレットははつと思つて、

「エスターを一人で行かせるわけにはいかん。彼女は俺の友の娘だ。ここで手放して貴様何ぞに犯されたら、友と合わせる顔が無い」

言つて二人の後を追い始めた。残された団員達は、虚しく吹雪く中、要塞に戻るしかなかった。

三十分程直線に歩くと、雪の盛り上がっているのが見えた。そこが、シベリアで暮らす者達が棲む家の入り口らしい。三人は中に入った。そこにはぽっかりと地下に向かつて掘られた穴があった。

梯子はしを伝つて下に降りると、幾つもの道に分かれた洞窟に出る。道の奥はいずれも、地中にもかかわらず明るく光っている。

アンリは二人をその内の一つに案内した。暫く歩くと、明かりの

下に着いた。そこは一つの部屋のようだ。土に囲まれた大きな丸い部屋には、熊やら鹿やらの獣が山のように積まれていたり、獣の皮の敷物が幾つも置いてあったりと、驚かされるものばかりだ。そこから辺に座れよとアンリに言われて、しぶしぶ二人は熊の敷物に座った。

土の匂いも獣も、ネオ・シャンハイのドームの中には無かった。なのに何故、懐かしいと思うのだろう。この北の地に降りた時もそうだった。自分達は、アポロ11が月面に初めて着陸した時のように異世界への第一歩を踏み込んだつもりでいたのに、心の中に暖かいものが流れこみ、そこが恰も自分^{あたか}の郷里であるかのような錯覚をした。自分は今、地球にいるのだと改めて思うのだった。

アンリは背負ってきた熊を地面に下ろし、それを引き摺って更に奥の部屋に入っていた。誰かと話す声が聞こえ、暫くして会話が途切れると、今度は毛皮のコートに身を包んだ美しい女が現れた。

コートの下から覗いた細い足はすらつと長く、また、コートの上からも豊満な胸が窺えた。アンリと似た、やはり銀色に近い色の髪をしており、腰に届くような長さなのに、束ねることもなく揺らいでいた。

あまりの美人の登場に、スカーレットは思わず生唾をのんだ。

女は二人の側に近寄り腰を屈めた。

「あなた達が空から来たってという人間なの？ 信じられないわ。魔術でも使ったのかしら」

「……せめて科学と言ってくれないか。我々は持てるだけの科学力を駆使してあの船を造ったんだから」

スカーレットの嘆きに女は、

「そういう話を聞くとますます信じられなくなるのよ。私達の一族は冬が始まる前からずっとこの地に棲んでいたわ。それからもう何世紀も経って……。今までこの地に訪れた者はなかった。ずっとずっと昔、まだ地球が少し暖かった頃、村の男衆が数人、地球に残

存する人類の影を追って旅に出たけど、結局見つからなかったらしいわ。以来、私達の祖先は、地球に残っているのは自分たちだけだと思っようになった。今もそう信じているの。でも、それが間違いで、今も地球の何処かに人類が生きているのだとしたら。ねえ、教えて。本当にあなた達は地球人なの？ 何処から来たの？」

スカーレットの胸ぐらを掴み、悲しみに満ちた顔で訴えた。

切実であった。彼女は今にも泣きだしそうだ。スカーレットは堪え切れずに女をそっと抱き寄せた。

「地球にはまだ沢山の人間が残っている。……多分、旅に出た男達が人と会うことが出来なかったのは、皆地下・核シェルターの中で暮らしていたからだだろう。今は地上で平和に……そう、平和に暮らしている。ただ、こんなに自然に囲まれた場所に住んでいるわけじゃないから、こっちの方が戸惑っているくらいだな。それに、我々だって、こうやって今も自然と一体化して生きる者がいるとは思わなかった。お互い様さ」

二人の会話が終わった頃、奥の部屋の方を見た。エステルはそこに怒りに震えるアンリを見付けた。

「マリア、お前はこんなオヤジが趣味だったのか。見損な ったぜ」
アンリはスカーレットに抱かれた女に向かって冷たい視線を投げた。確かにスカーレットは今年四十になる中年男だ。アンリが怒るのも無理ない。

「別に……、そんなんじゃないわよ」

マリアは立ち上がって部屋を去った。アンリはその始終を目で追って彼女が去ったのを確かめると、二人の前に腰をおろした。

「あいつは俺の女だ。手え出すんじゃないぞ、このクソじじいが」
「……！」

クソじじいとは聞き捨てならない。しかしここは彼の家だ。余計なことは言つまい。

「ところで、エステルとそのじじい。お前等に聞きたいことがある。本当はそれを聞くためにここに呼んだんだ。なあ、地球にはま

だ人がいるって、さつきマリアに言ったのは本当か?!」

アンリもまた、マリアと同じことを尋ねた。そうか、彼らは不安なんだ。この後、自分達が今までと同じようにこの場にとり残されて、そのまま存在を消していくのが。エスターとスカーレットは互いに合意して、今の地球の姿を彼に話すことにした。

話を始めると、別の穴からも次々に人が話に誘い寄せられて集まってきた。思ったより沢山の人がいるらしく、広い部屋は人で一杯になった。年寄から子供まで、優に五十人は超している。皆、珍しがって話に聞き入っていた。

異郷の話は面白いが、私達の話は彼らの耳にはどう聞こえるのか。エスターは不安に駆られながらも話を続けた。五百年の昔、科学者に乗っ取られた地球。その中で人が体験した地獄と、嘘のようにつづく平和。造られた世界に疑問を感じ、旅に出たこと、今自分達は地球を変えようと思っていることを。

話し終えると、今度は民衆から歓喜の声が寄せられ、拍手された。何処かの昔話でも聞いたつもりなんだろうか？　だがそれは違った。「よし、俺達も協力するぜ。何をどうしたらいいのかわかんねえけどよ」

男が一人、立ち上がった。次々と人々は賛同して拳をあげた。一丸となってESに協力しようというのだ。

「地球は今でも地球さ。地球があるから俺達はこうやって生きていく。それを知らせてやんねーとな」

アンリもそう言っつてエスターの肩を叩いてくれた。

目的なんて、最初はなかった。流されるままに生きようだなんて甘い考えの下で暮らしてた。やっと、私は目的を見付けたのよ。だって、まだ居るかもしれないじゃない。無くしたはずの希望を温めてて大切にしている人が。今はまだこんなに少数だわ。でもいつか出来る気がする。この星を蒼く染め直すことが。

知らず知らずのうちにエスターは、ジュンヤと同じ夢を唱えていた。夢は一つになり、星は輝きを取り戻すのだろう。

だが、そのためにはもう一つの夢の欠片が必要だったのだ。

7・蒼い空に消えた（前編）

ディック・エマードは一人、娘の帰りを待っていた。要塞の中の個室で男は、煙草なんぞを吸って時々遠くを眺めた。窓の無い窮屈な部屋は四メートル四方くらいしかなく、ベッドと机とパソコンがその殆どを占めている。男は机の椅子から立ち上がり、ベッドの上に寝転んだ。天井を見つめたまま、男は動かなかつた。

「星……」

男は呟いて煙草の火を消した。何故だろう、涙が零れ出て、男は何年振りに泣いたかなと一人笑いし、掛けていた眼鏡を外して涙を拭った。

娘はただ現地の人に連れていかれたただけだ、きつと戻ってくる。ハロルド・スカーレットも一緒なことだし、安心していいはずだろう。なのに、俺にはあの時の光景と重なって見えてならない。離れていると不安になる。

エスターは、エスターだけは……。

男の記憶は速い日に戻っていた。

ディック・エマードの脳裏に先ず浮かんだのは、美しい一人の女性だった。流れるような金髪に、豊かな胸元。男なら誰でも魅了される女だった。白い肌にほんのりとした桜色が浮かび上がった頼がまた可愛らしかった。

暗闇に光の如く、彼女の姿は浮かび上がり、ディックの心に一時の安らぎを与える。彼女はにっこりとディックに微笑みかけて、手を差し伸べた。ディックはゆっくりと近寄り、そっと手を延べた。刹那、彼女は張り裂けんばかりの悲鳴をあげ、表情は一変して悲槍の色になった。彼女の体は八方から引かれるように八つに裂け、当たり一面は血の色になった。迸る血飛沫ほしほしに、ディックは狂ったように女の名を叫び続ける。

「エレノア　……」

彼女の名は「エレノア・オーリン」。愛する女を忘れられぬ悲しい男は、彼女の忘れ形見である自分の娘・エスターに同じ名を語らせたのだった。美しい妻に瓜二つのエスターは、時々ディックに悪夢を見せる。闇に沈んだ遠い黒い記憶を。

「面白いものを発明したそうだな」

そう話し掛けてきたのは同僚のティン・リーという中国人だ。

「ああ。自分で言うのも何だが、あれは画期的な発明だ。地球の科学の歴史は大きく変わるぞ」

ディック・エマード三十歳、全く女つ気の無い、正直な青年だった。何の疑いもなくEPTの科学研究所で働いていた彼は、「若き天才」と呼ばれ崇められてた。多くの人はつけあがるのだろうが、彼は精進して全く気にも止めなかった。

研究所の長い廊下をリーと共に歩いた。リーが何者なのか、ディックは知らなかったが、彼はとても良い男だと確信している。研究に際して正直に指摘してくれる数少ない仲間の中でも、リーは格別な存在だった。

ディックはリーを自分の研究室に通した。そこにあつたのは巨大な何かの装置だ。その装置の天井と床には、厚さ二十センチ、直径一メートル程の円柱の機械が取り付けられている。円柱と円柱の間には空間があつて、そこに時折電磁波が流れていた。

「空間転移装置だ。これを使えば、物ばかりでなく人も動物も目的地に転送できる。月や火星の開拓地にだって一瞬で行けるんだ」

「……成程。ではこれを応用して……」

そうやって意見を交換し合った。リーに技術を盗まれているとも知らずに……。

その頃、ディックはエレノアに出逢った。二人は恋に落ち、二年後にエスターが生まれた。幸せな生活の中でディックは出世し、政府の巨大プロジェクトへの参加を許された。

リーはいつの頃からか姿を見せなくなっていた。

プロジェクト……FILE・AとFILE・Zという通称で呼ばれるそれは、全二六種の機密プロジェクトである。それぞれ異なるテーマで、大気に関するもの、火に関するもの、水に関するもの……、様々だ。

ディックはFILE・Dの研究室に招かれた。FILE・Dは別称「閉ざされた計画」。研究の内容も研究員にしか明かされない。政府本部ビルの地下十階から地下通路を抜けた場所、まさに「閉ざされた計画」に相応しい研究室に、ディックを含む二十名の研究員が集合した。そこで初めて内容が明かされる。

「人体と機械の融合により、人間は何処まで進化できるのか」

聞いた途端、ディックは異様な感じを覚えた。何を考えているんだ。融合だと?! 進化だと?! SF小説でもあるまいし……、可能だとは思えん。それに、何の必要があるというんだ。政府は本気でこれを実行させようとしているのか? 我々人類が、このドームの中で平和に暮らしていく限りでは、どう考えても不必要だ。

政府の役人が数人、薄暗い研究室に入ってきた。そのうちの一人が赤子を抱えている。

「実験体として、政府はこの乳児を提供します。生後間もない乳児です。健闘を祈ります」

役人は無造作に裸の赤子をテーブルの上に置いた。薄い布切れ一枚で包まれているだけの赤子は、何も知らずに泣くばかりだ。母親を求めるようでもあり、ミルクを求めるようでもある。泣き声に覚えがあった。顔を見た……、この子は!!

「私の……、私の娘だ!! 教えてくれ、何故娘が……。この子は私の娘なんだ!!」

研究員達は青ざめた顔をして、役人の方を振り返った。役人は振り返ってこちらを見た。何か心に捕われてしまった人形だ。その中に光は見えない。

「それがどうしたのだ。これは命令だ、総司令ドクター・T様直々のな。従ってもらおう」

役人は去った。

殴りかかろうとするディックを研究員達が押さえ付けた。声にならない声で叫んだ、叫んでも叫んでもどうすることも出来なかった。分かつてる、総司令の命令は絶対だ、逆らうことは出来ない。しかし……、それでは、私の……、私の娘は……、エスターは一体どうなってしまうのだ?! 私はこれからどうすれば良いのだ?! 誰も答えてはくれまい。幼いエスターは研究員達の手によって、透明なガラスケースの中に入れられた。鼠やハムスターと同じ扱いだ。人は去り、研究室には親子だけが残った。

夜が更けて、ビルの中から人の気配が消えた。だが、ディックはまだ地下の研究室にいた。叫び疲れたのか、壁に寄り掛かって眠り込んでしまっている。赤子もまた、ガラスケースの中で安らかな寝息をたてている。

コツツ、コツツ、と足音が次第に地下の研究室に忍びよる。ギイトゆつくリドアが開いて、男が一人入ってきた。ドアを閉め、部屋の中にディックの存在を認めると、透かさず銃を抜いた。

「何の真似だ」

寝ていたはずのディックの声に男はよろめき、銃の目標を乱した。男はそのまま去ろうとする。ディックは立ち上がり、男の首を後から腕で締め付けた。

「お前は……、リーじゃないか!」

男はティン・リーだった。ディックは腕を弛めてリーを放した。リーは苦しそうに二、三度咳払いをしてディックを見た。その目は何処か澱んで^{よど}いる。久しぶりだと喜びながらも、ディックはリーに以前とは違う妖しいものを感じていた。

「いいざまだ。貴様が堕ちていく様を見るのは気分がいい」

突然のリーの言葉に、ディックの心は砕けた。

「貴様の娘を実験体にしろと言ったのは私だ。私の権力があって初めて為せる業^{わざ}だ。どうだ、気分は。堕ちていく気分は」

「どうという意味だ……?」

「私は政府の最高権力者ティン・リー様だ。貴様が私に与えた屈辱に対する制裁をしてやるうというのだ」

「？」

「貴様は天才として騒がれ、しかもそれを当然のことのように思っているのか何の反論もしない。天才はここにもいるというのに、人は貴様だけを見る。気に入らん……、気に入らんのだよ。私より幾分でも賢い人間がいることが。それが貴様だ……。私を超えることは許されない。話によると貴様は街のスラムから来たというではないか。そんな奴に私が負けるわけがない。私は神によって創られた……、私は神だ。この地球を支配する。私を超えるものは、私の怒りに触れるものは、墮ちるべきなのだ！！」

ズギューンズギューン。二発の銃声。弾は見当違いの方向に飛んで辺りの物を壊した。

「正気か?! 何が神だ。超えるとはどういうことだ。お前は狂っているだけだ。どうしたんだ、リー!!」

ディックはリーの肩を掴んで強く揺さ振った。だが、何の反応もない。狂乱の叫び声をあげるだけだ。

「私はこの世で最高の人間だ! 私は神だ、私は全てだ。全ては私の思うように動く。だが何故だ、何故お前は思うように動いてくれない?! 何故お前は私を超えようとするのだ?!」

背筋が凍った。

こいつはもはや、リーではない、満たされぬ欲望に狂った悪魔だ。こいつが政府のアタマだと? 総司令はドクター・Tという男だとは聞いていたが、こいつとは。冗談じゃない。このままでは世界は滅んでしまう。

「だから私は貴様を墮とそうというのだ、ディック・エマードオ! ! 貴様が大切にしているものは全て壊した。墮ちろ、墮ちろ、奈落の底に墮ちるがいい!!」

ディックは勢いをつけてリーに体当たりした。リーは突き飛ばされ、だがその途中、青い光を帯びて消えた。青い光はディックが作

った空間転移装置の効果と全く同じ物なのだ。

あいつは俺の発明を盗んでいたのか……。なんてことだ。最大の敵となったのが自分の友人だった奴とは……。それにしても気になる。奴は全てを俺から盗んだらしいことを言ったが、まさか……。
ディックは家路を急いだ。

8・蒼い空に消えた（後編）

家で待っていたのは、ただの肉の塊と化したエレノアだった。頭と胴体、手足、バラバラにされ、血の海に沈められた。刃物で切り裂かれた跡はない。古代、四方向に紐を付け、牛馬で引いて切り裂いた刑があつたというが、多分、そういうことをされたんだろう。自慢にしていた長い金髪、血糊が付いてベトベトしている。ディックは恐る恐る、妻の頭を抱えた。苦しそうな顔。涙の跡が見える。妻は苦しい中、自分の名を呼んでいたのだろう、助けを求めているのだろうと思うと逃げたくなる。

「何が……、何がいけないんだ。俺は俺なりにやってただけだ。何でもこつなるんだ。どうして俺だけこつなるんだ　　！　　！」

彼の慟哭は誰の耳にも届かない。天には届いただろうか。死者は星になるといふ非科学的な迷信を、彼は信じたくなつた。愛しい妻は蒼い空に消えた。

でもまだ、エスターが居るじゃないか。エスター、実験体として手術が施される前に、俺が救つてやる。エレノアの分も。

ディック・エマードは上がりかかった夜の帳とぼりの中、ネオ・ニューヨークシティーの中心に聳そびえる政府のビルへと急いだ。

だが、彼に幸せの兆しは訪れなかつた。ビルで待っていたのは警備員で、彼は目隠しをされ、四角い部屋に放り込まれた。

目隠しを取つて初めて、彼はティン・リーの恐ろしさを知つた。そこは白い、何もない部屋だつた。天井に付いている蛍光灯と自分だけが、唯一この空間にある。こういう所に長くいると、人間はどうなるかというところ……。

「大分疲れているようだな、ディック・エマード」

リーの声が聞こえた。どこかにスピーカーがあるらしい。

ビルの一階分くらいの広さの部屋にディックは一人とり残されて声を聞いていた。

「プレゼントだ。君にはその部屋をプレゼントしよう」

「プレゼントだと……。嘘を付くな。お前の魂胆は分かっている」
隠されているだろう盗聴マイクに届くよう、大声で反抗する。

「お前は俺を廃人にしたいのか？！それが望みなのか！」

「そうだ。私は貴様を叩きのめしてやりたいのだ。白い空間、それは即ち無を表す。考える動物、人間は無に堪え切れず狂いだすのだ。恐怖、不安、幻惑……。貴様はどんなふうに私を楽しませてくれるのかな」

「……！」

ティン・リー……。貴様という男は……。音声途絶え、ドイツは再び一人になった。外からの音は一切聞こえない。孤独感が襲う。

知っている、知っていると。狂った人間がいかに奇妙でいかに恐ろしいか。お前がそうだ、リー。お前のように俺を狂わそうというのか。精神鍛練を積んだ者でさえ絶え切れぬというこの空間で、俺は狂わずにいられるのだろうか。

白い空間は彼を包み込み、ありとあらゆる幻を見せる。

先程見た妻の遺体がすうーっと目の前に浮かんできて、そこから絶え間なく流れ出る鮮血は足元に泉を作った。泉からぷくぷくと血が湧きだす。小さな手が血の中で喘いでいる。手はずんずん沈んでいって、到頭何もなくなつた。

目に焼き付いて離れないのは何も妻子のことばかりではない。ティン・リー、あの狂った男もまた、ドイツを悩ます。自分が信じていたもの、愛していたもの、全ては消えて、塵となる。楽しい日々は思い出されず、目の前の悪夢ばかりが聞こえてくる。

俺の名を呼ぶエレノア。もうやめてくれ、俺には何も出来ないのだ、エスターさえ助けてやる事が出来ない。

別の部良からドイツを監視していたティン・リーは、哀れな旧友の姿を嘲笑した。隠しカメラは、狂ったように壁を叩き続けるドイツク・エマーダの姿を捕らえていた。きつちりと固めていたはず

の髪は乱れ、声も絶え絶えに彼は叫び続けていた。何と言っているのか既に分からない。白い部屋から出たらしいことだけは読み取れるのだが。

「所詮、この男も人間だ」

リーはマイクを手を取った。

「エマード、私と賭けをしないか」

ディックの動きが止まった。辺りをきよろきよろと見回す。

「FILE・Dに協力するというなら、出してやってもいい」

「エスターを、エスターを返してくれ。俺にはあいつしかいないんだ、返してくれ」

漸く彼の口から人の言葉が聞けた。涙でぐしゃぐしゃの顔。

リーは満足していた。そうだ、私に請うのだ、そうしたら全ては私の思うままだ。ディック・エマード、貴様も私にとっては駒に過ぎんだ！

「いいか、私の質問にだけ答える。協力するのか、しないのか。しないというなら、死ぬまで貴様はその部屋から出ることは出来ないと思え」

ディック・エマードが覚えているのはそこまでだった。

その後、白い部屋から解放され、FILE・Dに携わることになる。娘の体に埋め込まれていく機械の部品、それに反してエスターは美しく成長した。愛するエレノア・オーリンのように。虚ろな日で過ごす日が何年となく続いた。罪悪感はず方もなく巨大で、押し潰される……、そんなもんじゃない。死以上の苦しみ、生きることそのものが彼にとっては苦しみだった。そして今も。

ノック音が聞こえた。ディックは返事をしなかったが、ドアが開いて人が入ってきた。エスターだ。父を見付け、側に寄った。父の涙の跡に、エスターは切なくなる。

「ごめんね。パパ」

（また、心配かけたのね、私。知っているわ、自分がどんな生い立

ちをもった人間なのか。もうパパに心配かけないって決めてたの(ね)

エスターはそれだけ言っただけで部屋を出た。

「謝らなければならぬのは、俺のほうだ……、エスター」
父のかすかな声を聞いた気がした。

シベリアの民の助勢が明らかになったので、作戦変更して一気にEPTに打撃を与えることにした。ジュンヤ・ウメモトが指揮を執り、ディック・エマードが監督する。

今、ESとEPTとの最後の戦いが始まるうとしているのだ。最後というのは言い過ぎかもしれない、だが少なくともESはそうだと信じている。世界を揺るがして、EPTを倒そう、そうすればこの星は救われると信じている。

作戦が実行に移されるまであと三日。ES要塞は慌ただしく動いていた。

ジュンヤ・ウメモトはスカーレット団長やシベリア側の代表者アンリ・ゲルニコフと共に作戦会議を続行している。ディック・エマードは科学チームを率いて、最大の難点である人工衛星の使用について研究を重ねている。エスターや他の特別調査団の団員達、シベリアの者達は、細かい作業にてんてこ舞いだ。皆が皆、それぞれ夢を持ちながら実行の日を待った。

作戦実行前夜、ディック・エマードは眠れずに、一人シベリアの雪原に佇たたずんで空を見上げた。

何年か振りに雪が止んだとシベリアの者は喜び、自分達の穴で酒盛りを開いている。空は晴れて満天の星空、うっすらと細い上弦の月が西の空で沈みかかっていた。

星なんてものは本や映像で見たことがあるくらいで、こうして肉眼で見たのは今日が初めてだ。心が吸い込まれていく、こんな澄み切った気持ちになったのは子供の頃以来かもしれない。俺もこの地球に住む人間の一人なのだ、当然のことなのに感慨深くなってし

まう。

空か……、故人シロウ・ウメモトの夢だった、空に行こうと急がされた。

要塞の下部ハッチが開いて、エスターがやってきた。寒いでしょうと白衣の上に毛布を掛けてくれた。

「俺はな、お前の親なんかじゃない」

ディックは初めて、娘に胸のうちの語を語る決心をしていたのだ。

「俺は親として、何一つしてやれなかった。何も守れない、雪辱を果たすためだけに生きる嫌な男だ」

「もし本当にそれだけなら、私はパパのこと好きになれなかったわよ?」

「……」

一瞬、エスターがエレノアに見えた。俺は科学が好きなのだ何の取り柄もない男だが、とプロポーズした時のエレノアの答えとよく似ていたのだ。血は争えんとはこのことが。

「お前は何のためにここにいる?」

娘に唐突な質問をぶつけてみたが、何も返ってこなかった。

「俺はお前の母親のために、つまり、俺の妻のためにここにいます。俺に関わってしまったばかりにいらん巻き添えを食って人生を駄目にした彼女のために、そして、お前のために」

「私は駄目になんか……」

ディックは要塞に向かつて歩きだした。

「あと五日だ……」

意味ありげな一言がエスターに突き刺さる。五日……? どういうこと、パパ……。

夜は明けて、いよいよ運命の日がやってきた。

9・栄光の果てに（前編）

完全とは時として、虚無に他ならないことがあるものだ。

築かれた万里長城も敗れる時があるように、今、完全に思われていたEPTの策略が崩されようとしている。油断をするのは一種の自惚れからくるといっても過言ではないだろう。政府の頂点に立つというティン・リー、ドクター・Tという通称で呼ばれている彼は、いわば自惚れの塊である。

ティン・リーがいつ、何処で生まれ、どのように育ったのか、知る者はいない。親しくしていたディック・エマードでさえ、彼の素性は知らないのだ。分かっているのは彼が中国人（正確には、中華系）だということだけなのである。

その昔、「地球大改造計画」を提示し実行に及んだEPT（地球計画班）の狂科学者たちの意志を継ぐリー。ニューヨーク・シエルトアのメインコンピュータで倒れた男と同じように、彼もまた、濁った瞳の色をしている。

ES要塞司令室。

地球を冒流した罪深きEPTを倒すべく集った勇者たち。全ての準備は整った、さあ、作戦開始だ！！全員が各々の配置に付く。

そして、地球標準時午前九時を回ったとき、それは起こったのだ。

ドド　ン、ドド　ン、地球のあちこちで爆音が鳴る。火山が噴火したかのようにも思えるその昔は、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジア、オーストラリア、南北アメリカ、地球上の全てのドーム上空で聞こえた。

人々は恐れ戦き空を見上げる。何が起こっているのか。EPTの警備隊がヘリを飛ばしてドームの天井を調べに行く。しかしそれは天井近くで弾け飛んだ。粉々になったヘリが街に降り注ぐ。地鳴りがして、人々は怯え、地に伏せて止むのを待った。「大変だ、ド

ムに穴が開いている」と言う声。空を見上げると、そこには青い空が覗いている。ドームの外は死の世界だ、猛毒の大气が充満していると信じていた人間達は、死を覚悟した。それなのに実際、何の変化もない。俺達は生きているじゃないか、あんな大きな穴があいたつてのに！！

EPT本部ビルでは多くの科学者や役人達がこの突然の出来事の対策をどうすべきか、頭を悩ませていた。

ESの仕業に違いがないということだけは分かっているものの、こくなつてしまつては、もうどうしようもない。今までのESといえは、ちよろちよろ逃げまわる鼠かゴキブリのような、手でちよいと摘んだり叩いたりするだけで停止してしまう貧弱な行動ばかりだった。

今回このような動きに出たのは、何か完全なる勝算があるからに違いない。例えばこう……、政府を倒せるほどの……。十年前に逃亡したディック・エマードという博士がいたが、まさか彼が助勢を……、でなければこんなことは出来ないだろう。まさか、まさかな……。

何時間にも及んで対策を練つたが、結局何も浮かばなかった。今ESを倒したところでどうにかなるといふものでもない、我々EPTが面目を失うだけだ。

爆発がおさまった頃、今度はテレビというテレビで奇妙な映像が流れだした。地球のどこかから壊れたドームを映している。現在の映像だ。そこは雪で覆われた北の地のようだ。

「地球上に住む全ての人間に告ぐ。我々はESの者だ。これからEPTの虚妄についてお教えしよう」

声はディック・エマードのものだ。人工衛星を経由して世界各地に放送している。その声に誘われて、人々はテレビに見入った。

「EPTは現在の地球の状態を死としている。しかし、それについては完全に嘘であったことが証明されたわけだ。我々ESはドーム外の調査で、この星がまだ死していないことを確認した。大气は地

球規模で正常である。放射能の残存量も然程ではない。旧熱帯地域では再び植物が繁殖し、酸素を大量に放出している。それにもよりも我々を驚かせたのは彼らの存在だ」

画面が変わった。そこに見えたのはシベリアの大地に暮らす人々の姿だった。彼らの住処である地下の様子がありありと映しだされた。ドームの人々は目を真ん丸くして、テレビに齧^{かじ}り付いた。何だ、我々は今まで嘘を信じていたのか、EPTは我々に何を伝えていたのだ?! 衝撃は世界を包み、EPTへの不信感となって現れた。

このことを黙って見ていられる程、ティン・リーは強い男ではない。怒りが頂点に達しているのか顔を赤らめ、何度もワインのグラスを握り潰している。ディック・エマード、またしても奴にやられたかと思うと、憤り、悔しさが募る。

そうだ、EPTはドーム内の人間に対して嘘の情報を流した。異論を唱える奴らは皆殺しにしたはずだった。それもこれも、人間共を一ヶ所に集めて統治し易くするためだ、EPTが絶対的な存在として地球に君臨するためだ。

地球は死んでいる、シエルターに入らなければ、ドームに入らなければ皆死ぬとさえ言うっておけば、馬鹿な奴らはそれを信じてついてまわる。人間の心理を利用した、完璧な作戦だった筈なのに、あのディック・エマードの所為で何もかも崩れた。

再生は不可能だろう。これでは何のために先人が宗教や民族的な概念の弾圧をしたか分からない。全ては私のためだ、私が全てを完全に支配するためだけに歴史は動いてきたというのに!!

リーは怒って自分の部屋を飛び出した。

あの男の考えは分かっている、あの男がどうやってドームを壊したか、見当も付いている。奴に一言、言うておく必要があるな……。

携帯用小型空間転移装置を取り出し、行き先をインプットする。

「メイン・コンピュータルームへ」。ピツという音と共に、リーの姿は光の泡になった。

「成功だ　　！！」

シベリアのES要塞内部は歓喜の声で溢れていた。予想通りの展開に一段と沸く。誰かれ構わずに抱き合っつて跳ねて踊って、まるで何かのお祭りのよう。特にシベリアの人達の喜びは絶大で、奇声を上げながらあちこちで騒いでいる。

アンリ・ゲルニコフはどさくさに紛れてエスターにしがみ付いた。「エスター、お前のお陰だ。俺等、テレビに映っただけだよ、何か、こう、でっかいことやっつてんだなあっと思っつとすんげー嬉しくなっつてさ。なあ、今夜はお祝いだ、一緒に寝ようぜ」

「何言っつてるのよ、馬鹿じゃないの、あんた。寝ることと喰うことしか頭に無いんでしょう」

エスターはアンリの弁慶を思い切り強く蹴っつてその場を離れた。本能だけで生きてるのかしら、この人は。

自分に好意を持つてくれるのを嬉しく思いながらも、アンリの恋人マリア・イエコンスキーに悪い、と胸が痛かった。が、美人の彼女はESの男達にちやほやされているし、アンリはアンリであっつこっちで女を引っ掛けてる。

変なの、二人はお互いが異性と一緒にいっても、嫉妬やいてないじゃない。

エスターは感服して部屋をあとにした。

司令室でディックとジュンヤは、床に胡坐を掻いて日本酒を飲んでた。そのうちそこにエスターが加わって、三人でワイワイやった。三人は何故か酔えなかった。何だか足りない気がする、こんな簡単に終わってしまったていいのだろうか。まだ何かあるような気がしてならない。

そしてその予感は見事に適中してしまったのだ。

10・栄光の果てに（中編）

巨大スクリーンに覚えの無い映像が映った。途轍とてつも無く大きな機械が沢山置いてある部屋だ。

「メイン・コンピュータルームだ」

ディックには見覚えがあるようだ。メイン・コンピュータといえば、世界の中枢を為しているという、EPT管轄下にある巨大装置……。と、いうことはつまり……。

「EPTのお偉いさんからメッセージでもあるのかな」

ジュンヤは立ち上がり、部屋の一番高いところにある司令席に昇った。

画面がぶれて、今度は一人の男が映った。若い、二十代の中国人である。長髪で紺色のスーツを着ている。

ディックは一瞬、我が目を疑った。だって、そいつは……、ティン・リー、俺と共に研究室にいた頃のティン・リーだ。何故だ。あれから十七年、俺は相応に年をとって、もう五十に手が届く頃だ。なのに何故、奴は年をとらない？！ 奴は一体幾つなんだ、四十くらいのはずじゃないか？ 俺は何か勘違いをしているのか？

「大分驚きのようだね、ディック・エマード。それから初めまして、お二人さん。私は彼の同僚だった、EPT総司令ティン・リーという者だ。随分派手にやってくれたもんで、吃驚びっくらしているところだよ、こっちは」

十七年前と声も態度も変わらない。懐かしい感情が込み上げてくる。それは怒りだ、憎しみだ。俺はこの男に人生を無茶苦茶にされたんだ。今更のこのこ出てきて何を言うつもりだ、これ以上、何がやりたいというんだ。

ディックは思いながらも尚、黙っていた。敵の挑発なんかにはのるもんか。のったら十七年前の二の舞になりかねないから……。

「こっちも驚いているところだ。何てったって、総司令自らお出ま

しなんだからな」

「ほう。きみはもしかやES創設者シロウ・ウメモトの御子息ジュンヤ・ウメモトかな？」

今度はジュンヤを挑発している。

何が何でもESを潰したらしいな……。

「そうだ」

ジュンヤも堪えている。父親を殺された恨みがあつたから。

次いでエスターに白羽の矢が立った。

「君はエスターといったね。なるほど、エレノア・オーリンにそっくりだ。彼女は全く聡明な女性だった。私の女にならないかと言ったら断られたよ、それより死んだほうがまだと言つてね。だから殺してやったのさ、バラバラにして。最高の絵だったよなあ、ディック・エマード……！」

ディックの堪忍袋の緒がぶつと途切れた。懐から銃を出してスクリーン上のリーを目掛けて一発撃った。弾はスクリーンのリーの額を割ったが、同時に正面のスクリーンが壊れた。両端のスクリーンには今尚、忌々しいリーの顔が映っている。エスターはディックに近付いて無理矢理銃を下ろさせた。息は荒い。ディックはうまい具合に興奮してきていた。

「貴様に言われたくはない、ティン・リー。お前は一体、どれだけ人の心を踏み躪れば気が済むんだ。どれだけの人にじの人生を無駄にすれば気が済むんだ……！」

リーはフンと鼻で笑った。

「どれだけ……？ そんなのは知らんな。貴様だつて私の心を何度となく踏み躪ってきたじゃないか」

「踏み躪る……？ そんなのは良心的な奴が使う台詞だろ……！」

ジュンヤも我慢できずに本音を吐き出した。

「ディックが言えないんなら俺が言つてやる。ティン・リー、お前は悪魔か？ 死の使いか？ お前には大切なものを失う人達の気持ちちが分からないのか……！」

「分かるさ」

見下すリーの視線が例えようもなく憎たらしい。ジュンヤは興奮に自分を見失いかけている。エスターはおどおどして二人を見た。今度リーが何か言ったら、二人は後先顧みず^{かえり}にリーの元へ行ってしまうのではないのか。

「貴様等揃って私の大切なこの星を壊してくれたじゃないか」

逆上した二人は声を掛け合って空間転移装置を作動させようとする。「目標ネオ・ニューヨーク、ンティー上空」。

エスターは二人を止めることが出来なかった。異変に気付いた何人かが司令室に入ってきて二人を止めようとしたが、無駄であった。ES球形要塞は地上から離れ、青白い光の粒になる。光は空間を越え、ネオ・ニューヨークシティに出現した。巨大な機械製の月がEPT本部ビルの真上で静止している。

ディックとジュンヤは到着すると直ぐにメイン・コンピュータールームに突入しようとした。

「やめて!! 二人共これは罠よ! 今行っても敵の思う壺だわ!」

「それでも俺達は行くんだ。全ての元兇はあの男だ、あいつを倒せば終わる。今なら……」

反重力システム搭載の最新型エアカーに飛び乗り、エンジンをかけると、二人はメイン・コンピュータのある地下、シエルターの跡地を目指した。

行つては駄目、憎しみだけで動いても冷静な判断は下せない。ジュンヤ、あなたのお父さん、そう言ってたじゃない。どうしよう……、ESは内部から崩れていってしまう……。

司令室に人が集まりだし、突然移動したのはなんだ、スクリーンが壊れているぞと騒ぎたてた。画面にリーの姿はなくなっていた。

ディックとジュンヤを乗せたエアカーはシエルターに向かい、低空飛行を続けている。街で無数のEPTの兵隊や兵器が待ち伏せし

ていて、それらの攻撃を、右に左に交わしながら進んで行った。

ネオ・ニューヨークシティーは途轍も無く広い。世界長大のドームはEPT本部ビルをすっぽり包んでしまうほどだ。ドームの穴から覗いたES要塞を背景に、エアカーは道無き道を突き進んでいた。途中ES本部から通信が入った。送信しているのはメイシィ・ウメモトだ。どうしたんだと尋ねると彼女は、

「エスターが……エスターが攫さらわれたの……！」
血相を変えて言った。

二人共、考えていたことは同じだ。分かっている、犯人はあの男だ。ティン・リー、奴に違いない。

「中国人だったわ。突然現れたかと思うと、エスターを連れて消えてしまったのよ！彼の伝言を伝えるわ。『メイン・コンピュータルームにて最後の決着をつけよう』、以上よ。私達も今、そっちに向かうわ」

「いや、来るな。ここは俺達に任せてくれ」

エアカーは更に加速した。

ディック……、何か考えでもあるのかしら。たった二人で何が出て来ると？今は信じましょう、二人を。メイシィは妥協して要塞の移動を諦めた。

曇天の下、稲光が閃光を走らせ空を斬る。何百年か振りに、ネオ・ニューヨークシティーに雨が降り注いだ。これからの戦いの序曲のような豪雨は、容赦無くエアカーを打ち付けた。

11・栄光の果てに（後編）

メイン・コンピュータルームでティン・リーは、似合わぬ汗を掻き、ディック・エマードとジュンヤ・ウメモトの到着を待っていた。さつきはまんまとやられてしまったが、今度こそ勝てる自信がある。ESを完全に潰すまで、私のこの気持ちは晴れないだろうと思いつ、最後の手段に出ることにした。ディック・エマード……、やはり、敵にすべきではなかったのかもしれない。天才と騒がれるのも無理ない、だが彼もまた、私に及ぶことは出来ないのだ。リーはゆつたりと椅子に腰掛けて敵の到着を待った。

エアカーの二人は、シエルター跡に着くと、急いで地下に続く梯子を下り、メイン・コンピュータルームに向かった。重々しい鉄の扉は、彼らが来るのを知っていたかのようにすうつと音もなく開いた。

「待っていたよ、ディック・エマード博士、ジュンヤ・ウメモト君」
リーは不適な笑いを浮かべて二人を迎えた。この野郎は何を考えているんだ？ 甘いマスクの下で一体どんな悪巧みをしているんだ？！ ジュンヤはリーの考えを読み取るうと観察していたが、彼の心の内は真つ暗で何も見えない。

「エスターはどうした」

ディックは一步、一步、リーに近付いた。懐から銃を出そうとしているのをリーは見逃さなかった。

「まあ、少しくらい待って私の話を聞いてくれ。そしたら会わせてやるよ、エスターにな」

「……分かった」

仕方なく立ち止まって話を聞くことにする。

「FILE・Dを覚えているか？ 超極秘プロジェクトの一つだった、その中でも最重要視されていたFILE・Dの正体を君は知っていたか？」

「人間と機械の融合の結果、最強の人間を造ろうとしていたのだらう、俺を苦しめるために」

「違うな」

リーはメイン・コンピュータに寄り、キーを押している。何かのプログラムを作動させようとしているのだろうか。

「あのプロジェクトにはもっと、深い理由と目的が隠されていた。貴様等はそれに気付かなかった。それはな、エマード。貴様等

ESの連中のようにEPTに逆らう者が現れたとき、そいつらを根絶やしにするための殺人マシンを造ることだ。媒体は誰でも良かった。偶々貴様の娘が選ばれただけのことだ。今、エスターは、メイン・コンピュータにより、最後の改造手術を施された。もはやエスターは貴様の娘ではない。EPT史上最高の殺人マシンなのだ!!」

ギィン、鈍い音、コンピュータルーム全体が大きく揺れる。

奥の扉が開いて、何かが姿を顕あらわにする。何か……、それはエスターだった。体中機械に変えられたアンドロイドは感情の消えた眼でデイクとジュンヤの方を見た。明らかに違う、エスターの体を借りた化物が目の前に立っている。……あの笑いはこれだったのか。エスターを利用して俺達を殺そうと……。卑劣な男だ、こいつは。目的のためなら手段を選ばない。やはり、この男は。。

「畜生めが!!」

デイクは銃で何発もリーを撃った。リーは笑って避けようともしない。何故ならばエスターが、

「死ね、リー!! 貴様だけは許せん!!」

リーの前に立ちはだかり、全ての銃弾を防ぐからだ。弾は全て鋼鉄の体に当たった。掠り傷すら付けられない。エスターの行動に、デイクはただ茫然として立ち尽くしてしまう。銃を握る力さえ無くして、床に落とした。

「エスター!! 止めるんだ!! そいつは敵だらう、どうして助ける?!」

ジュンヤはエスターの後に回って、リーを突き飛ばした。リーは

まだ笑っている。薄気味悪いな……、何だっつんだ、こいつは。ジ
ユンヤが屈めていた腰を起こした瞬間、エスターの鉄腕が彼の首を
締め付ける。

「エスター……、どうして……」
意識が朦朧としてきた。

エスターは力を緩めることなく、締め付け続ける。やがて、ジユ
ンヤの体はぐったりと力を無くし、エスターはそれを遠くへ放り投
げた。

この場で喜んでるのはティン・リーただ一人。自分の望んだま
まの光景なのだから。

「全ては始まったばかりだ。さあ、ゲームを続けようじゃないか」
敗北だけが待っている。岸壁の下で荒波が飛沫をあげた。

戦いは最終局面を迎える。

12・『虚空の惑星』（前編）

EPT本部ビルの上空に停滞したES要塞は、月の光に照らされて地面に丸い影を落としている。

昼間の出来事は嘘だったかのようないつもの夜を迎える街、ネオ・ニューヨークシティ。その中で続いている戦いを知る者は少ない。核シエルトアの跡地は郊外にあった。誰にも知られずにひっそりと残っている。

かつて、一人の科学者とマシュー・ヴィクトの息絶えたそのコンピュータルームで、再び戦いが繰り広げられていた。

時間は川のように流れたが、戦況は変わらなかつた。アンドロイド・エスターに守られて、ティン・リーは余程余裕なのか、椅子に座って寛いでいた。ディック・エマードは地面に項垂れて、黙っている。ジュンヤ・ウメモトは倒れたまま動かない。絶体絶命とはこういう状態のことを言うのだろう。

「面白くないな、始まったばかりだったのに。戦意喪失か？ 情けない」

リーの言葉に反応する者もない。

「エマード、私はFILE・Dを、貴様なら完成してくれると信じていた。それがこのざまだ。改造の途中、^{しか}確と見たぞ、貴様、エスターに何もしてやらなかつたな。FILE・Dは、成長に伴って徐々に改造していくことに意義があつたのに。そのせいで、エスターに残されていたのはたった五日だった。娘のために尽力を惜しまない、そういうのが人間でもんじゃないのか」

「今……、何と言った……？」

エマードの体から鬨気が湧き起こる。失われていた輝きが少しずつ取り戻される。

「『娘のために尽力を惜しまない』と、確か、そう言ったな……」

彼は二本足をしっかり土地に着け、リーを睨み付けた。汗で体を

濡らして、死に物狂いで彼は立った。絶望は風と共に去った。

「俺だつて怠けてたわけじゃない。それを知つてて……、やらなかつただけだ。世間の親は笑うんだろつな、自分の娘を早死にさせる気が、と。でもな、例え後指差されようとも、俺は……、俺は絶対にやらんと決めていた」

「どうしてだ」

「分かるもんか……、分かるもんか、貴様に。分かつてたまるか

……」

床に落とした銃を拾いあげ、撃つまで僅か数秒。彼の残り少ない弾の一つはティン・リーの心臓を射抜いた。リーは床に倒れ、うつ伏せになった。ディックは据わつた目で荒く息をした。終わったのか……？ 俺の、長い長い……。

「ディック・エマード……、私の負けだ。認めよう……」

即死と思つていたリーが助けを請うように手を延ばしていた。二十代だつた彼は徐々に老い始め、八十歳くらいの年寄りへと変身した。顔にも手にも、皺が隙間無く現れ、しわがれた爺おじいちゃんになった。黒かつた髪も急激な老化と共に白く染まつた。何が……、どうしたんだ……。リーはどうなつてしまつたんだ……。？ ディックは不思議に思い、リーの側へ行こうとした。

「来るな……」

爺の声は、何だかもの悲しい。

「貴様に同情などされたくないわ……！ 私は……、わしは、見ての通りの年寄りじゃ。メイン・コンピュータにプログラムされてたあるデータをもとに、わしが永遠の若さを手に入れて、早三百年。以来、EPTの総司令として、時を過ごしてきた……。偶に現れる、天才と呼ばれる者達から技術を盗み、わしは、到頭ここまで上り詰めた……。わしは、神によって、創られた……。わしが死んでも……、まだ神が残っているぞ……。フハハ……。ッ。貴様は、わしに負けぬ強い力を、持っているようじゃ……。じゃが……。わしに勝つことも……。で……。き……。ん……」

ぞつとして、ディックはリーの額に一発打ち込んだ。ゾンビ……、不死身なのか、こいつは。さっきのは確かに奴の心臓を……。

取り敢えず息の根は止めた。しかし、神とは……？

主人を失ったアンドロイドは暴走を始めた。「EPTに反抗する全ての者を抹殺せよ」。生前、リーが吹き込んだ言葉だけを頼りに彼女は動く。力の抜けたディックに、エルボーを喰らわせた。ディックは血を吐き、彼女は仰向けの体に伸しかかると、心臓を潰そうと踏み付ける。喘ぎ声がジュンヤの目を覚ました。壁まで這い、やつと立ち上がる。彼が見たのは悲しい場面だった。父娘同士、何で殺し合わなくちゃならないんだ……！！

「『虚空』の星だ、ここは」

ジュンヤの呟きに、アンドロイドの動きが止まった。

「何もありませんよ」

ディックはアンドロイドの足を払い除け、体を起こして咳をした。「こんな……、何もない星だなんて思わなかった。少しくらい何かあったっていいじゃないかと、俺は思い込んでいただけなのかもしれないな。だってさ、この星には何もないじゃないか。俺達は何もかも失ってしまったじゃないか」

ジュンヤは泣いた。家族以外の者の前で泣くのは初めてだった。

アンドロイドは乾いた眼で、じつと彼の涙を見つめていた。

どこかで聞いた、同じような台詞。あれは誰が言ったんだろう。

「ティン・リー、あなたはこの星のどこが好きなの？　ここは「虚空」の星よ、何もないわ。太陽も大気も大地も、みんなつくり物じゃない。唯一信じれるはずの自分の体もつくり物だわ！　何もないのよ、カラなのよ。どうしてこんな何もない世界を好きになれるの、どうして続けようとするのよ……！」

あれは……、私……。ティン・リーに攫われてここに来た時、私はそう言って彼の手を振り解いた。幾ら改造されたからって、私はどうしてリーの手助けを……。

一筋の涙が流れた。突然、彼女の中のコンピュータが異常を来し

た。電磁波が彼女とメイン・コンピュータを包み込む。

ジュンヤは直感した、エスターを動かしていたのはリーではなく、メイン・コンピュータではなかったらどうか？ ……メイン・コンピュータを破壊すれば、エスターは助かるかも……。そこで思い止まる。

俺は今、この星のメイン・コンピュータを壊そうとしている。もし、これがなくなったら、世界中が混乱に陥ってしまうかもしれない。俺達が恩恵に預かった地球から分離して飛ぶES要塞は別にしても、全ての機能が停止してしまうんじゃないか。ティン・リーの言った神とはこいつのことか。それでも……。

「今必要なのは、こんなんじゃないぞだろ」

自分自身に言聞かせ、ジュンヤは単身、メイン・コンピュータの破壊に向かった。武器なんて無い、リーが座っていた椅子を持ち上げ、駆け出した。アンドロイドは彼の動きを止めようとふらつきながら近付いてきた。悪い、思いながらも彼女を突き飛ばし、彼はメイン・コンピュータに、渾身の力を込めて椅子を降り下ろした。

それはあつという間に炎に包まれた。全機能停止、アンドロイド・エスターの体から力が抜け落ち、倒れかかった。

ジュンヤは慌てて椅子を投げ出し、重くなったエスターを担いだ。ディックも自力で立ち上がり、三人で何とか出口まで辿り着いた。

「長い……、旅路だった……」

振り向き、ディックは最後の一発をメイン・コンピュータに撃ち込んだ。爆音は益々激しくなり、黒い煙が立ち上った。エアカーの中、ES要塞に向かうディックは、その黒い煙に哀愁を感じていた。黒い煙、それはまるで、彼の過去の記憶のようだ。俺の辛い過去……、その黒い建と共に、天に消えてくれ。もう二度と振り返らない、エレノアの笑顔さえ残ればそれで十分だ……。

エスター・エマードは朝の眩しい光で目を覚ました。どれだけ眠っていたのだろう……、ここは何処なのだろう。

ふかふかしたベッド、窓辺でほんのり暖かい。随分長い夢を見ていた、私がパパやジュンヤを殺そうとするなんて。

ベッドから起き上がり、姿見で自分を見た。すっかり変わってしまった自分の姿に落胆する。やっぱり、夢じゃないよね、どうしよう、私はとんでもないことをしてしまった。

部屋にメイシイが食事を持って入ってきた。

「あら、エスター、起きたのね」

あれ？ 何だか違うわ。いつもと同じ。私はジュンヤを殺そうとしたのよ？ メイシイ。言おうとしたが、エスターは黙って朝食を頬張った。

彼女は朝食後、外に出掛けることにした。何だか青臭い匂いがする、私の鼻がおかしいのかしら。空気もすぐくおいしい。エスターはゆっくりと、玄関の戸を開けた。ぱあつと光が充滿して、彼女は思わず目を閉じた。目を凝らして景色を見る。

「うわあ、綺麗……！」

彼女は草原の中にいた。見渡す限りの草原、花が咲き、蝶が飛び交う、立ち並ぶ雪を抱いた峰々。これは夢だろうか。私がいる今が夢で、二人を苦しめたあの日は現実？ それとも逆？

自分が寝ていた家は立派な一軒家だ。彼女は自分の知らない世界に酔い痴れていた。

「これはきつと夢ね……」

「夢なんかじゃないさ」

後から話し掛けたのは、一段と遅たくましくなったジュンヤだった。気のせいか、年をとったように見える。心なしか、背も高くなった。

「あれからもう、五年だ。君は五年間、ずっと眠ったままだったん

だよ、エステル」
草原に一陣の風が吹いた。

エステルとジュンヤは、小高い丘の上を遊歩していた。春の涼しい風が頬を掠めた。緑色が少女の心を癒した。空は快晴で、日はもうすぐ真上につこうとしている。

「もう二度と目覚めないんじゃないかと思っていたんだ。良かった。本当に良かった」
良かった

ジュンヤはそう言って空を仰いだ。

「恥ずかしい話、エステルと初めてあった時、俺はお前のことを眠れる森の美女だと思ってしまったんだ。可愛いだろ。ついさっきまでも、やっぱりそう思ってた。今だから言うよ、俺はお前が好きだ、エステル」

青い空の下、二人を穏やかに包む草原は、太陽の光をいっぱいに浴びてきらきら輝いている。

「ありがとう……、でも……」

「いいんだ、姿形とか、そんなのどうでもいい。過去のことなんか振り返らなくていい。俺はエステルが好きなんだ。お前がどんな奴だろうと、俺は構わない」

立ち止まって、エステルの両手を握り締めた。金属に成り果てた手に彼の温もりが伝わってくる。真剣な眼差し。

「結婚しよう」

少女は青年の胸に飛び込んだ。青年はしっかりと少女を抱き寄せた。もう、悲しい思いはさせない。お互いきつと、うまくやっていけるさ。

丘の向こうに掘った小屋を建てて、ディック・エマードが研究室にしていると聞いて、そこに向かうことにした。ディックはまだ、エステルの目覚めを知らない。二人、手を繋いで歩いた。彼はどんな顔をするだろう。

途中、ジュンヤにいろんな話を聞いた。ここに移住してきた経緯やその後ESのこと、EPTのことを。アンリとマリアはめでたく結婚したそうだが、もう三才になる子供がいる。ESの皆は故郷に帰ってそれぞれ楽しくやってるようだ。今はESもEPTもない、平穏が続いている。幸せの色と同じように、緑も以前より多くなった。「お前の寿命が縮まるのを知っても、ディックがお前を改造できずにいたのは、どうしてだと思う?」

「?」
「エレノアの面影がお前から消えるのを恐れてたんだよ。ああ見えても、結構ロマンチストだよなあ」

あの日、ES要塞に帰った後、ディックは壊れかかったエスターを必死に直していたらしい。娘の名を何度も呼んで、彼は懸命に頑張っていた。五日しかなかった寿命をめいっばい延ばすために、何日も寝ないで作業してた。そして、エスターは生き延びることができたのだ。エスターは父に感謝した。ありがとう、パパ。やっぱり私、パパが好きだわ。

丘を越えると、小さな小屋が見えた。二人の姿を見付けたからなのか、ディックは慌てて小屋を飛び出し、両手をいっばいに振っている。いつもの、少し汚れた白衣を着た父親は、ずり落ちた眼鏡を直すことも忘れて、似合わぬ涙と精一杯の笑顔で娘を出迎えた。

「お帰り、エスター」

13・『虚空の惑星』（後編）（後書き）

やっと終わりました……。編集。

とつてもじゃないけど、今はこのような展開には出来ませんw

久しぶりに読み返してみても、恐ろしく前向きな小説に仕上がっていたので、びっくりしました。

実はこの小説は、10年ほど前、高校3年生のときに執筆したもので、今回は漢字変換、言い回しのミスの手直しのみで、殆ど原文のままのものを掲載しました。……なので、展開が変でも見逃してやってくださいw 突込みどころが万歳過ぎて、どうしたらいいかわからないのは私も一緒です（泣）

3人称なんだか1人称なんだかわからないし。語彙が少なすぎ（汗）10年も経てば作者も大人になるんですよ……（遠い目）。

ところで、初期設定資料というのが出てきました。

どうやら最初はエスターは当初、ディックと血が繋がっていない設定だったようです。そんなもって、リーは『正体不明の科学者に身体を改造され、絶対的な若さと権力を手に入れた』と書いてありました。……なんてこった。

私、そんなこと考えてたんだ……。

ショックで立ち直れないよ……。

読み返して、納得できなかったのは、ストーリーや設定だけではなくて、キャラもだったりするのです。

ディックがいい人過ぎる。どうしたんだ。

エスターが気丈過ぎる。守れない。

ジュンヤがカッコ良過ぎる。お前は悩んでればいいんだ。

リーがカッコ良くない。そんなんじゃ惚れないよ。

何がどうしてそういうふうになったのかは忘れましたが、なんだから、薄っぺらい。もっと、肉厚で、濃くて、人間味のあるキャラが欲しい。……と、言うのを踏まえて、本編では全てのキャラが>ANOTHER STORY<と違う性格になりました。

おかげさまで恐ろしいくらい怖い展開に。

ダークでシリアス。無駄に武器とか、兵器とか持ち出す人たち。歪んだ感情、非日常な世界、何処までも続く闇。これらを使って、現代における様々な問題を遠まわしに批判していたりする……んですよ。実は。

最終的に、ハッピーエンドで終わった>ANOTHER STORY<ですが、本編はどうなるのかわかりません。

エスターがどうなるのか、ディックの過去にはどれくらいのが詰まっているのか、リーは何処まで策略を巡らせているのか、それはまだ秘密です。

これは一つの、完結した「もう一つの『虚空の惑星』」というものであって、たくさんの方岐点のうちほんの一例に過ぎません。こういう結末もあるんだ、位の気持ちで読み終えてくださると嬉しいです。

あとは、「もとの話がこうなのに、どうして本編はこんなに膨らんだんだ」と思っていただければそれで（言い訳）。

>ANOTHER<ご覧いただいた方にはおわかりの通り、まだまだ本編は序盤なのです。（今中盤への差し掛かり位かな）

執筆速度はカタツムリのように遅いですが、>ANOTHER<同様、いつか完結すると思いますし、リーも倒せると思いますので（汗）、今後とも虚空の惑星をよろしくお願いいたします。

（2007年7月）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3723c/>

虚空の惑星<ANOTHER STORY>

2011年5月8日10時41分発行